
虹色魔石の生産者

koru.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹色魔石の生産者

【Nコード】

N5678X

【作者名】

koru.

【あらすじ】

気がつきや異世界に居りまして、ひょんなことから虹色の魔石を作ることができる特異体質であることを知った元OL20歳の愛と冒険の異世界生活物語（誇大表現アリ）

いち話いち話が短いので、おつまみ程度の感覚でお付き合いいただければ嬉しいです。

1 いらっしやいませ

まず、ごつごつしていない丸めの石を拾います。

サイズは2センチ位が良いです。

それを綺麗に洗います。

そしてそれを口に放り込み、3時間程舐め続けます。

3時間後口から出すとあら不思議、虹色に輝く特殊魔石の完成です！

洗って、良く拭いて、磨き粉を付けて磨いて、商品として販売しています。

超レアアイテム”虹色魔石”のご用命は、魔石屋”早く日本に帰りたい”までお越しください。

店主である私、西村守が対応させていただきます。

なお、当店ではツケを受け付けておりませんので、悪しからずご了承ください。

2 客商売

「虹色^{これ}魔石の入手方法は教えられない、と、いつも言ってるでしょう」

小さなテント内には私と、大柄な魔術師。

2人入ってるだけで息苦しい狭さ。

無店舗営業を始めて3ヶ月、大分お金も貯まったし、もうそろそろ店舗を持つてもいいかもしれない。

こんな狭苦しいところで、こんなムサイ男と頭を突き合せなきゃならない苦痛がなくなるならば。

「全属性を持つ魔石など、この世に存在するわけが無いんだ。もしや、コレは魔獣の核と魔石を融合させて作った、特殊アイテムなんじゃないのか」

淡々と、私の顔色を見ながら喋る魔術師に、あからさまにうんざりとした表情をしてやる。

「そう思うんなら、自分で作ってみりゃ良いじゃないですか」

「もうやってみた。でもできなかったから聞いているんだ」

そりゃできないでしょうね。

「じゃあ違うんじゃないんですかー？ もー！ これ以上営業妨害するなら、今後貴方には売りませんよ」

上得意の客だが、こんなに絡まれるなら居なくてもいいや。

口を尖らせて抗議すれば、魔術師は一瞬黙り込む。

「……それは困る」

「じゃあ、詮索するのはなしで！ 本日のお買い上げは、極小粒が5個と大粒が1個で23万になります」

金平糖サイズの魔石を5個と3センチ位の大粒の魔石を1つ、手作りの小さな巾着に入れる。

先にお金を受け取り、金額を確認してからその小袋を魔術師に渡す。

ひと月の生活費に余りあるその金額を、ポンと出す金持ちっぷりが憎いぜ。

「毎度ありー」

「次はいつごろ店を出す」

帰りがけに聞かれて、一週間後と答える。

3 そんな理由で魔石ゲット

魔石生産の裏話。

最初この世界に来たときは、死ぬかと思った。

うん、本気で死に掛けた。

主に空腹で。

で、空腹を紛らわせるために、小石を飴代わりに舐めたのがきつかけだった。

ひたすら舐めて、ふと口から出したとき、只の小石が虹色の石に変わっていた。

あんまり綺麗だったから、一か八か宝石店に売りに行った。

宝石店は普通の宝石のほかに、魔石（火・水・風・土・光のそれぞれ）の属性の魔力のこもった石も取り扱う場所なので、私の持ち込んだ虹色の石が、全属性を備えた稀有な魔石であることが判明、高額で買い取ってもらえた。

今思うと、なんて良心的な店だったのだろうと思う。

ぼろぼろな風体の小娘が持ってきたわけのわからない石を買い叩きもせずに、真っ当な金額で引き取ってくれたのだから。

そうして私は路地裏生活から一転、まともな宿屋で寝食を得る事ができるようになったというわけさ。

4 宿屋の女将さん

「マモたん、朝でしゅよー」

甘ったるい声が耳元をくすぐる。

「マーモーたん、起きないと、お姐たんねえが一緒に寝ちゃいましゅよ

ー」

布団の端を捲られる気配。

背後にぴたつとくつつく柔らかい体、そして私の寝巻きの裾から侵入する華奢な手指がくすぐったくて身を振る。

「んーっふっふっふ、かーわぁいいい」

耳たぶをぱくつと啜えられ、甘噛みされるに至り意識が覚醒。

「……おはようございます…、女将さん」

「女将さんじゃなくて、お姐たんねえで、良いってばあ」

全力で拒否。

愛妻家の宿屋しゆくやの主人まにに締められたくないので。

5 宿屋の主人

「俺でさえ……モーニングキスしてもらったことねえのに……くそがつっ！」

という台詞と共に、勢いよく井がテーブルに置いていかれる。

足音も荒く厨房に戻るご主人。

いや、モーニングキスもモーニングコール（？）も要らないし。

あなたの嫁の暴走を止めてください。

そして、スペアキーを彼女に渡さないでください。

「いただきます」

目の前の井に手を合わせて、スプーンで掻っ込む。

親子丼美味し。

醤油が無いから塩味だけど、美味し。

着々と日本の味をこの宿に侵食させてゆく。

問題の多いこの宿を変えれないのは、性格に難在れど料理の腕は

一級品であるご主人の飯のせいだ。

胃袋を掴まれるとはこういうことをいうのか……。

6 門兵

「気をつけて行くんだよ、近場でも何があるかわからないからね」
顔見知りの門兵が小さい子にするように、腰を折り頭の位置を下
げて私と視線を合わせながら頭を撫でる。

「…はい、行ってきます」

純粋な心配であると思われるので、人の良さそうなその青年に素
直に返事をして門を通してもらう。

只…一つ言わせて貰うなら、私は彼よりも年上だ。

彼はまだ十代であると、他の兵から聞いている。

私は今年で二十歳になった。

身長が147センチであるのがネックなのはわかっている、日本
に居たときでさえ高校生と間違われていたんだから。

だから、この世界で子ども扱いされるのも仕方ないんだろう。

甘んじていよう。

7 石集め

河原で丸っこい小石を採取する。

あんまり大きいのは舐めるのが骨だから、せいぜい大きくて3センチ位。

できれば2センチ以下のサイズが手ごろだ。

販売単価も3センチ越えだと8万、2センチが5万、もっと小さいのだと3万だ。

普通の単属性の魔石なら3センチでも1万程度くなので、虹色魔石の希少性というか、お値段の高さがわかる。

魔石は生活の中に深く根ざしていて。

コンロ代わりだったり、扇風機的な何かだったりとても便利に使われる。

勿論虹色魔石もそれら全てのことができるわけだけど、そのために使うなら普通の単属性魔石を使うほうがコストパフォーマンス的に良い。

だけど、私の魔石は魔術師の人たちに飛ぶように売れる。

……何に使われているのか、まだ聞けないでいる。

8 誘拐

率直に言おう、誘拐された。

手ごろな小石を小袋に程々に収集して帰ろうとしたとき、見知らぬおっさんが近づいて来た。

「お嬢ちゃん、こんなところで何をしているのかな？ お父さんやお母さんはどうしたの？」

おっさんこそどうした、この河原は街道から外れていて人なんか来ない場所だぞ。

十分に警戒していたが、あっさりと捕まってしまった。

仕方が無いだろう、私は魔術師でもないし剣士でもないんだから、ついでに言えば足も遅い。

「やあっ！！ 何よ！ 私を誘拐して身代金でも取ろうと思ってるの！？」

腕を拘束され、肩に担ぎ上げられて運ばれる。

「いやいや、君は十分価値があるよ」

そう言いながらお尻を撫でられぞっとした。

これはあれか、身代金目的の誘拐じゃなくて、人身売買目的の営利誘拐か……。

どっちにしても絶体絶命だ。

9 他にも居た

連れて行かれたのは王都の近くに在る街だった。

王都ほどではないが、中々活気の在る……わりと粗野な感じの街だ。

その街の更にスラム的な場所。

私の他にも攫われてきたと思しき女性達と子供が数人一つの部屋に押し込まれている。

汗臭くてそれ以上に汚物くさい。

非常に不衛生な場所である。

嘔吐しなかった自分に拍手。

「お前は未通娘おほこだろうからそのまま売りに出そう。いい値が付きそうだ」

おっさんはそう言って私を部屋に押し込んで行った。

いやいや、未通ではありませんがね？

これでも過去に彼氏の一人や二人居たわけなんですよ？

などとは、ばらしますまい。

経験者とわかれば、味見されてしまうかもしれないわけですし。

自分が異世界に居ると理解したときと同等の絶望感を感じながら、部屋の隅で膝を抱えた。

10 逃げるために

こっそりと、小粒の小石を数粒まとめて口に含む。

少々じやりじやりと砂が混じっているが仕方が無い。

この程度の小石なら30分も舐めていたら虹色魔石に変わる。

魔石を作ったところでどうなることも無いかもしれないが、何もしないでいるのも辛い。

もしかしたらこの中に魔術師の人が居るかもしれないし。

そうしたら、上手くこの魔石を使って逃げることもできるかもしれない。

ぷつと一粒掌の中に石を吐き出せば、ちゃんと虹色魔石が出来上がっている。

地道に10粒程の魔石を作り上げた。

後はこの魔石を使える人を探すだけだ。

11 魔石を使う人

魔術師、あるいは魔術師でなくても魔石を使用できる人を探すため、ずっと膝に伏せていた顔を上げて室内を見回した。

狭くはないが薄暗く人の絶望で溢れかえった部屋の中で、しつかりと私と合う目があった。

背筋のしゃんとした、幼くても現実を見据え何とかしようとしている気概の在る目……か？

何とかなるだろうか。

少年はゆっくりと立ち上がり、私の方へと歩いてくる。

そして、どすん、と私の前に座り込む。

目にある力は、実のところもう最後の残り火なんだろうか。

体は随分と疲れているようだ。

「……何か、食べ物を持っていますか？」

小さな声で訊ねられ、首を横に振る。

生憎と河原へと持参していた昼食は、誘拐されたときに放置する

こととなった。

「……先程なにか口に行っているように見えたのですが？」

魔石を口に行っていると見られていたのか。

持っていた小袋の口を開き、ころころと魔石と小石を手のひらに

零す。

「空腹を誤魔化すのに、舐めてただけ。残念だけど、只の石と、

腹の足しにならない魔石です」

少年は私に断りを入れてから、私の掌の上から虹色をした魔石の

粒をそっとつまみ上げた。

そうして、魔石を検分し、少しだけ目を丸くした。

「これは……虹色魔石？」

その名称を知っているということは、この少年は十中八九魔術師なんだろう。

確認してきた少年に、頷いてみせる。

「君が、取ってきたの？」

取ってきた、が何を指しているのかちよつと判らない。

「それは、私が商うために所持している魔石です」

「……そう、ですか」

私の掌の上に魔石を戻し、少年は少し逡巡してから私の目を見て口を開いた。

12 望みを託し

「その魔石を数個譲ってくれませんか」

案の定の言葉だった。

「君は、魔術師ですか？」

頷かれる。

「君にこの魔石を渡せば、ここから逃げ出すことは可能ですか？」

少し躊躇われ、そして言葉が返される。

「僕だけなら、逃げ出せます。自警団に訴えてここを押さえてもらいます」

きっぱりと言い切ったその言葉に、私は首を横に振る。

そしてここに連れ込まれるまでに見た状況から。

「街の自警団と、この組織は癒着があるみたい。自警団と思しき人たちとすれ違いましたが、誰一人として私を助けようとする人はいなかったから」

白昼堂々の誘拐行為なのに。

「だから、大変かもしれないけど、王都まで助けを呼びに行ってくださいますか？」

石粒と魔石が混ざった中から魔石をすべて取り出し、それを少年の掌に握らせた。

13 石を舐めつつ

魔術で部屋をこっそり抜け出した少年を送り出してから一日が経過した：多分。

窓の無い部屋だから、太陽の動きがわからないし、食事は一日に一回、朝なのか夜なのかわからない時間に支給された。

掌サイズの硬いパン一つを少しずつ噛んで、唾液で柔らかくしながら食べる。

少量でも良く噛むせいか、割と腹が膨れる気がする。

懐かしいなあ、この世界に来た当初の過酷な生活が思い出される。パンすら手に入れられず、石ころを舐めたあの頃。

パンをもらえるだけでもありがたいなあ。

きつちり”いただきます”と”ご馳走様でした”をしたら、まわりの人たちから少し引かれた。

いやいや、有り難いことなのになあ。

壁に背中を付けて楽な姿勢を取ると、小袋から出した小石の土を払い、数個口に含み転がす。

数名の子供が飴と勘違いして私にねだってきたので、石ころであることを言ってから渡した。

子供らは私の真似をして口に含むと、直ぐに吐き出した。

「だから言ったのに」

「なんで石なんか食べてるの？」

素直な疑問に、小さく笑う。

「少しは腹が膨れる気がするからだよ」

そういうと、子供らは吐き出した石ころをもう一度口に含み、飴のように舐めた。

ああ、無事にあの少年が助けを呼んで来たら良いんだけど……。

14 深夜の救出

多分深夜。

皆が皆寝静まった頃、それはやってきた。

壁の外及びドアの外から聞こえる物騒な音に一気に意識が覚醒する。

とりあえずドアの前から離れておく。

室内の全員が目覚め、部屋の中央に固まっていると。

思いのほか普通にドアが開かれた。

「お、待たせ、しました、約束、守りました」

ドアを開けたのはあの少年。

まだ一昼夜くらいしか経っていないのに、王都まで行って帰ってきたのか。

息を切らせている少年に駆け寄る。

「ありがとう。大丈夫だった？」

私よりも少し背の低い少年を抱きしめ、労わるように背中を撫でる。

「だ！！ だ、だ！ 大丈夫ですつ。 王宮騎士団が派遣されたの

で、もう大丈夫です」

王宮騎士団……それはまた、ずいぶんと大きいところが出てきましたね。

15 救出されて一息

くっさい部屋から救出されて、この街の役所の一室で食事を頂いている。

私より前に入っていた人で、かなり汚れてしまっている人たちはお湯を貰い体をきれいにし、簡素な服を支給されていた。

「ああやっぱり居た！ 無事だったか！」
やっぱり？

声の方を振り向けば、うちの店の上得意であるあの大柄な魔術師が一直線に私に向かってきた。

口に入れていたご飯を飲み下し、椅子から立つ。

「どうしたんですか？ こんなところに」

「馬鹿がつ！ 一人で外なんか行くからだっ！」

え、え？ 何で怒られてるの私。

目を白黒させていると、目の前に立った大柄な魔術師に頭をがしがし撫でられた。

なんで撫でられてるの私？

「無事でよかった」

ひたすら撫でられる…頭がぐらぐら揺れて気分が悪くなりそうなんです。

16 仮眠後帰宅

推測しますに。

私が居なくなる＝虹色魔石が入手できなくなる。

ということでのこの魔術師が心配したのだと、うむ、納得。

華麗なる自己完結で、この状況の説明を付けようと思うのだがし
かし。

「あー、すみません、ひとりで帰れますから」

「気にするな、どうせ同じところに帰るんだ」

深夜に救出されて明け方まで仮眠を取った後、半分眠ってる状態
で強引に馬上に乗せられ、馬を操る魔術師に腕の間でちょこんと…。

一度バランスを崩して落馬しそうになったせいで、魔術師が片腕
を私の腰に回してホールドしてくれるのは有り難いんですが、密着
することになって居た堪れないわけです。

朝の肌寒さから守るようにマントにくるまれて、顔だけ外に出す

……どこのカンガルーの親子ですかと。

朝もやの掛かる早朝で、他に人もいないから、暖かさ優先で我慢
しますけどもね。

それにしてもだ。

急いでいるのか駆け足で走る馬の振動でお尻が痛い。

もう乗馬はしないでおこう、そう思うくらいには……。

王都まで徒歩で半日だったが、あと何時間この苦行をせねばなら
ぬのかと考えると、現実逃避と疲れでうっかり馬上で寝てしまいそ
うになった、危ない危ない。

17 向かう先

ぼっくりぽっくりお馬さんに揺られる。

さつき休憩したときに、お尻が痛いことを訴えて、一人で歩いて帰ると言ったらゆっくり歩いてくれるようになった。

もっと早く言えばよかった。

街に入るが、降ろされる気配無く…不穏な方向を目指している。

「あれ？ どこ、行くんですか？」

「折角だから、このまま城へ」

何をどうすれば”折角”で、”城”へ行かねばならないのか、さっぱりわからないわけです。

魔術師の操る馬は城を目指し…ああ、城門を潜っちゃった。

「宿いえに帰って休みたい」

「少しだけ、顔を見せてやってくれ」

誰に？

聞きたかったが、ぐっと我慢してみた。

顔を見せれば帰れるなら、文句なんかで時間を食うのは無駄なこと。

やっと馬から下りたときにはすっかり腰砕けになっていて、魔術師に子供のように抱っこされて運ばれたことは記憶から除外する方向で。

18 偉そうな人

で、こちらはどちら様でしょう。
随分偉そうなんですが。

「お前がああ魔石を販売している娘か」

随分偉そうな…。

「何処から仕入れている、仕入先を聞かせたまえ」

随分偉そうな…。

「両親はどうした、まさか、お前のような子供が一人で商っているわけではあるまい」

随分偉そうな…。

「答えられんということは、非合法的ルートであるということか」

随分偉そうな…。

「今仕入れ元を明かすなら、稀有な魔石であるが故、罰は与えずにおくぞ」

随分偉そうな…。

「何か答えんか！ 娘っ！！」

.....
むかつ。

ゆっくりと息を吸い込み、口を開く。

「では申し上げさせていただきますが。大体、誘拐されて帰ってきたばかりの小娘を、無理矢理連れて来させた挙句、1時間以上も待たせて来たかと思えば、椅子にも座らせないまま勝手にべらべらと自分の都合ばかりを並べ立て。まずは座らせる、こっちは慣れない馬で足腰がぐがく、夜もろくに寝てないというのに、茶の一つも出てこないし、一体どんなクソかと思えば。魔石の仕入れ元を教えるときだ。仕入れ元を教えるってことは、今度は私を介さず魔石を手に入れようとしているのバレバレ、ありえないこと言い出し、教えるわけねえだろ、非合法がなんとか言えばこっちがびびるとでも思ってたんだが、親のことまで引き合いにだして揺さぶるうな、クソもいとこらだ。終いには、いま教えたら罪には問わんとか、ありえねえ、大体どんな罪だよ。どうせ権力で法もなんもかんもねじ伏せて、私を潰すなり殺すなりするつもりなんでしょうが。私を殺したら、魔石を入手できなくなりますよ」

ニツコリとした笑顔つきで、マシンガントーク。

目を白黒させている多分貴族な感じのおっさんと、ぼかんとした顔でドアの前で衛兵よろしく立っている魔術師を見て、少しすつきりした。

20 軟禁中

只今絶賛、軟禁中。

投獄されなかっただけマシかな……いやいやいや、妥協してはいけない。

大体私悪いことしてないもん。

出された紅茶を飲み、美味しいクッキーをもぐもぐもぐもぐ。

「ああ、美味しい……」

うつとりと呟くと、くすりと控えめな微笑みが降って来る。

「お代わりはいかがですか？」

給仕をしてくれる女中さんの勧めるまま、2杯目をいただきながら、景色の良い窓の外に目をやる。

王宮の5階（最上階）にある客室なので、王都が一望できます（他に高い建物ないし）。

滅多にできない経験なので、とりあえず堪能することにしました。今後の身の振り方は、その都度決めていくこととします。

21 着せかえ人間

「すまなかつた」

頭を下げる体格の良い魔術師。

「……それは、どれに、対しての……」

つい先程まで、手が空いていた女中さん数名に取り囲まれて、女子として磨かれていた私は、真っ白に枯れる寸前です。

至れり尽くせりは楽しいのですが、強制的に全裸にされて、あらあら、まあまあ、言われながら下着のフィッティング…必要以上に乳を揉まれた気が、いや、まさかね…そして、着せ替え人形タイム、そして最終仕上げのネイルと髪と化粧を…。

久しぶりの化粧に、顔面が息苦しいです。

因みにこれら全て、女中さんの私への（小動物に向ける的な）愛だそうです。

今着てる年齢的にNGな可愛い服も、女中さんから頂いたお下がりです…胸の辺りが苦しいけど。

「可愛いと思う」

「は？」

思わず不審な声を上げて、魔術師を見上げる。

22 よし、服屋に行こう

「可愛いと思う。今度私にも服をプレゼントさせてくれ」
真顔で言ってくる魔術師に、引く。

「い、いえ、服は自分で買えますから」

「いや、是非買わせてくれ」

「あ、あのですね、だから、自分で……」

「なんなら今行こう。そうだな、今行こう」

目、目がマジですね！

逃げる体勢を取っていたのに、あっさり捕まった。

逃げ足の遅さには定評があります。

「ちよつと待ってください。私ここで軟禁されてるんですよ？」

「……いや？」

子供のように抱っこされるのに抵抗しながら、聞けば否定され……
否定？

23 実はおもてなしでした、とな

結局のところ、おもてなしされてただけらしい。

高所〓良い景色を見せよう

個室〓ゆっくり休ませてあげよう

お茶・お菓子〓美味しいものを食べさせてあげよう

とって食われるかと思ったから、ホツとしたが…。

「なぜ抱っこで運ばれてるんでしょう…。私、歩けますよ？」

お姫様抱っこじゃないだけマシかもしれないが、すれ違う人に振り返られて辛いです。

「歩幅が違いすぎる」

コンパスの差はしかたなかろうが！

身長147センチと2メートル近い大男じゃどうしたってサイズが合うわけがない。

「…大丈夫だ、まだ伸びる」

それは、私がまだ成長するからがっかりするなと言ってるのか。

「伸びません。もう、14歳の時に成長は止まりましたから、これこれ6年もこの身長です」

ぴたりと立ち止まり、私を見る魔術師の目が大きく見開かれた。

24 プロポーズ

服屋さんに連れていかれ、本日二度目の羞恥プレイ。

服屋さんで採寸等が終わりぐったりしているところに、どろろに出かけていた魔術師が戻ってきたのだが…。

私の目の前に、バーンと現地語の書類を置いて一言。

「結婚してくれ」

何のことかと思うだろう？

私にもさっぱりなんだ、白昼夢を見ているかと思ったよ。

何か悪いものでも食べたんだろうか？

そうでなければ、今まで別段何の脈も無かった人間がプロポーズなんて突飛なことをしないだろう。

とりあえず、魔術師が渡そうとする婚姻届らしき書類を押し返す。

ああ、店員さん達の興味津津な視線が痛い、ここでなし崩しになんかするものか。

「お断りいたします」

「何故だ？」

なぜモクソもあるか。と言いたいところだが、ここは穏便に、

この人は上得意のお客様。

「私の名前も知らないじゃないですか？ 私も貴方の名前を知らないです、なにも知らないような者同士でいきなり結婚などというのは可笑しいと思います」

理解してください、貴方は単なる顧客であります、友人ですらありません。

ふむ、と頷く魔術師。

これで納得してくれたいんだけどね。

25 魔術師さん家

興味津々もいいところな店員たちの視線にやっと気づいた魔術師の配慮により、落ち着いて話すために服屋さんから移動。

ああ、まあ、安心して話せる場所っていったら限られてくるよね。

移動先は、魔術師の家でした。

一応一軒家です、一応二階建てです。

外観は普通です。

中は、男の一人暮らしです。

まだ胞子は飛んでない…大丈夫。

ものに埋ま^ミっているというわけではない、ただ、埃が凄^ヒい。

何年掃除していないんだ。

喘息もアレルギーも持っていないので大丈夫だが、デリケートな人が来たら一撃だな。

居間はわりかし埃がかぶってない…どうやらここが生活の中心らしい、言ってしまう^ミえば、ここで寝起きしているのだろう、そこな魔術師よ！

唯一まともな…十中八九睡眠を取るのに使用していると思われる居間のソファに着席し、事の次第を聞くことになった。

無論、茶など出てくる余地はありません。

26 保護理由

結婚話をとりあえず横に置かれて、魔術師の家に連れてこられた理由は以下のようなものだ。

「どうやら、私は狙われるらしい（今現在はまだ大丈夫だが、時間の問題とのこと）。

理由は虹色魔石だ。

案の定というやつです。

虹色魔石を販売しだして、その稀有な魔石の存在を知った国では、他国に知られる前に、私の販売する魔石を国で優先的に買い上げようという話が持ち上がった。

そして私が王宮に呼ばれ、高い位の某氏との面会と相成ったわけですが。

子供（に見える…心外ですが、事実は真摯に受け止めます）である私じゃ話にならないから、仕入先を聞き出してそちらと提携し、私を仲買として売買するか、私の親に繋ぎを付けて話し合いをしたかった、ということだ。

ちょっと待て、あのおっさんの言葉でそこまで理解できるか！

「うむ、少々言葉足らずなところがあるお方だがな」

少々という範囲の広さの定義を直すといいと思います。

「それでどうして、結婚なんて話が出るんですか？」

魔術師は少し視線を彷徨わせた。

27 結婚理由

要約すると（魔術師も喋りが上手ではない）。

お偉いさんと私との対話が終わり（対話…？）、私が客室でまったり休んでいるあいだ（私的には軟禁）、魔術師とお偉いさんとの話し合いにより、私を”保護”することに決まったと。

話し合いの結果、保護役として兼ねてから顔見知りである魔術師が選ばれたわけだ。

そこまではいい、まあ、どうでもいい（まずは私に話を通せと言いたい）。

問題はここからだ。

「子供なら保護の名目で、一緒に暮らして問題が無いが。やはり年頃の男女だとそういうわけにもいくまい、世間の目もあるのだから、夫婦となったほうが何かと何かと何かと…」

何かとなんなんだ……。

「ようは、契約結婚ということ？」

助け舟を出してみた。

ようするに、私を保護する名目として結婚という体裁をとりたいということにはわかった。

「契約……ああ、まあ、そういうことでもいい」

歯切れの悪い魔術師だ、それに”そういうことでもいい”なんていう曖昧な言い方はよろしくない。

ジト目で見っていたら、開き直った。

「私は君を守る、君は虹色魔石を国に卸す、そのために一緒になるう。私と結婚してくれ」

思いのほか男らしく潔い、なおかつ真摯な態度が決め手となり、結婚を承諾しました。

ぶっちゃけてしまいますと、ここでこの話を蹴ってしまうと、虹色魔石がらみで色々と悲惨な目にあいそうな予測が容易にできてしまうわけで。

メリットとデメリットを天秤に載せた結果、スコーンと天秤が傾いたわけでありませう。

28 契約書に署名

合意の上、婚姻のための契約書（誓約書？）にサインした。

こちらの文字はイマイチ把握できていないが、名前だけは書けるように女将さんに特訓してもらっていたから、よかった。

「綺麗な字だな」

「……どうも……」

自分の名前だけなんですけどねまともに書けるの……と、少々複雑な気分でサインを終える。

「マモリ？」

「そう、守^{まもり}。ええと、貴方の名前は……ノー、ス？タ？リア？……」

ただたどしく読む様子をじっと見つめられ、白状する。

「ごめんなさい。名前は書けるんだけど、ほとんど読めないの……」

識字率の低い国だから、可笑しくはないと思うんだけど。

魔術師は少し考え、自ら書いた字を指でなぞりながら。

「ノースラート・ロンダッド」

「ノースラート・ロンダート？」

「ロンダッドだ。書類提出以降はノースラート・リタ・ロンダッ

トになるがな。これからは、マモリも、マモリ・レイ・ロンダッ

ドとなる」

守・レイ・ロンダッド……。

そうか、名前も変わるのか……感慨深いな、契約結婚だけど。

29 ダニはいかん

さて、保護けっこんという名目のもと、本日から寝泊まりすることになりました。

手際がよろしいことに、服屋で実質的な拘束を余儀なくされている間に、私の常宿から勝手に荷物が移動されていました。

後に聞いた話では、女将さんは激しく食い下がったらしいが、ご主人の窘めたしなと（むしろ喜んで撤去の手伝いをしたのだろう、ええ目に浮かびますとも）魔術師の押しの強さに泣く泣く引き下がったそうだ。

調印式（印は使ってないがね）が済んで、同居することが確定し、二階にある部屋の一つに案内されました。

案の定埃まみれです、まあ、階段からして埃が堆積していたわけなんです。

何年二階に上がってなかったんでしょうね？

さて、ひとこと申しましょう。

これだけ埃が溜まっているわけですから、当然ヤツらも生息していると思って間違いないわけです。

ヤツら…そう、ダニ共です。

ダニの居るベッドで眠りたくありません。

当然です。

いくらアレルギーがなかるうが、奴らは関係ないですから、果敢に攻めてきますから！

魔術師に……じゃなくて、ノースラアトさんに……呼びにくいからラアトでいいや、実際に呼ぶとき注意すればいいや……ラアトに力説しましたとも。

納得したらしいラアトはポケットから私がいつも高額お買い上げ時に買い物袋代わりに渡している小袋を取り出すと、中から小粒の虹色魔石を一粒取り出した。

「浄化」

まるで2人が同時に発声しているような不思議な声で言葉が紡がれると、ラートの掌の上の魔石が砕け散り、同時に途方に暮れるほど埃まみれだった室内が一瞬のうちに輝きを取り戻した。

初めてナマの魔法を見て、ぽかんとする私。

あの淀んでいた空気も清々しいものに変わっている。

恐る恐る室内に入り、大きく場所を取っているベッドへ近づき掛け布をめくってみる。

「中まで綺麗になってるっ」

心なしか、リネンから爽やかな香りがする気がする（気のせい）。

「当然だ。今の魔石の大きですら、この部屋をここまで浄化することができるんだ、虹色魔石の凄さが判るか？」

全然わかりませんが。

「もっと大きな魔石だったら、この家丸ごと浄化できるの？」

できる、との答えに、大急ぎで居間に置いてある荷物から、魔石のストック袋を1つ持つてくる。

「このくらい？ もっと大きい方がいい？」

2センチ魔石を取り出してから、これじゃ小さいかと3センチ魔石も取り出した私の手から、ラートは2センチの魔石を拾い上げた。

「コレで十分だ」

「じゃ、それをお願いします！」

すばらしいね魔法って！ 異世界に来て初めて魔法に大感激です。

3 1 魔石の使用法

魔法って何て素晴らしいんだろう。

すっかり家の中が綺麗になりました！

「こんなに簡単に綺麗になるなら、なんでもっと早くやらないんですか？」

綺麗になった台所でお水を飲みながら（お茶等の食料は軒並み全滅していた）聞けば、渋い顔をされた。

「簡単ではない。あのサイズの虹色魔石を丸々1個消費するほどなんだぞ、魔石無しで魔法を使えば、半日は昏倒している」

……え？

キョトンとした私にラアトは呆れた視線を向ける。

「魔石を扱っているくせに、知らないのか。魔石とは、魔道具の燃料としても使うが、魔術師が魔法を行使する際に、魔力を補う役割を果たす物だ」

なるほど。

「虹色魔石は、本来、その魔法の行使に必要な種類の魔力：たとえば、今回の浄化ならば、水と風の魔石が必要なのだが、それを1個の虹色魔石で補うことができる。より複雑な魔法を使うとき、それがどれ程重要なことになるか……」

珍しく饒舌なラアトに感心しながら聞いていたら、ラアトの眉に皺が寄った。

「本当に知らずに売っていたのか？ こんな珍重なものを、あれだけ無防備に売っていて、今まで良く無事だったな」

え？ えええ??

驚く私の頭を、ラアトがぐしゃぐしゃと撫でる。

「まあいい、今後は私がお前を守る」

「そういう契約ですし？ よろしくお願いします」

念押しされなくても判ってるよー、造った魔石はちゃんと国にだ

け卸すつてば。

「……ああ」

微妙な表情をしたラァトに目を逸らされた。

32 ムツツリか。

何にせよ、自宅ができたことは嬉しい。

いつまでも宿屋暮らしは無理だな、と思ってたし、街の中に家を
持とうとしたら身分証明が必要となるし、街の外に一人暮らしは怖
いし。

こつちの世界で結婚することになるなんて考えてもいなかっただけ
ど、身元を得るのには手っ取り早い方法だったんだねえ。

与えられた部屋の箆笥に、ラアトが（勝手に）宿屋から運んでく
れていたわずかばかりの荷物を移してゆく。

着替えと歯を磨くもの等こまごましたもので、80センチ四方の
箱に収まる量ですから、たいしたことは無いんですがね。

「終わったか」

背後から掛かった声に、反射的にビクツと身がすくんだ。

部屋に入るときはノックくらいするもんでしょくに。

いや、それよりも何よりも。

「いま、終わったところですけど。一つ確認してもよろしいでし
ょうか？」

収納の終わった引き出しを押し込み、ゆっくりと振り向く。

「荷物を梱包したのは、貴方ですか？」

「……」

目を逸らしたな。

「私の下着、数枚足りないのですが、お心当たりは？」

「いや…あの……」

宿屋の女将との二択だったんですがね、こちらが犯人でしたか。

33 下着店

きつちりみつちりラァトとお話し合いをして、今後このようなことが無いよう嚴重注意、及び、私の部屋に入らないことを約束させた。

翌日、紛失した下着は弁償していただくことになった。

さて、この世界にも、男性が入りにくい店というのは存在するわけです。

服屋に隣接してある下着専門店なんてものがそれに該当するでしょう、間違いなく。

「……私を選んでいいのか？」

下着専門店まで引っ張ってきたラァトが、少し困惑したように言うのに頷く。

勿論嫌がらせです。

なのに……なぜ。

「これと、これなんてどうだ」

女性店員からおすすめの商品などを聞きながら、普通に女物の下着を選ぶラァトの根性に……負けた。

紛失した枚数の倍も買ってもらったから、何も言っまい。

34 電池(?) 交換

その後大量の食料品を買い込み、帰宅。

魔術師であるラアトを荷物持ちにしていたせいか、奇異の目で見られたが、気にしたらいかん。

生鮮食品を水の魔石を使用した冷蔵庫に入れ、根菜類は木の箱に入れて冷暗所に。

乾物も風通しの良い日陰にしまった。

ここで問題が一つ。

「冷蔵庫、冷たくないんですけど…」

「ああ、魔石が切れてるからな」

いや、切れてるからな、じゃないし。

冷蔵庫を開けて上部にはめ込まれている魔石を取り出せば、3センチ程の大きさの水の魔石はすっかりその効力を無くし、良く磨かれた石に成り下がっていた。

「生憎と水の魔石の手持ちがないな、明日にでも買って来よう」

いやいやいや！ 明日って！ 生鮮食品が腐りますがな。

というかね、有るじゃないですか丁度良い魔石。

「ちゃららちゃらちゃらあゝ にじいろませきー」

小袋から同じくらいの大さの虹色魔石をとりだして、冷蔵庫の上部にはめ込む。

冷蔵庫は一瞬身じろぎして、その後問題なく稼動した。
よかったよかった。

「……………」

背後でリアトが何か言いたそうな顔をしていた。

35 充電してリサイクル

その後、居間以外のすべての部屋の魔石を交換した。

すべてと言っても、台所のコンロ及び明かり、台所の続きにあるバスルームの明かりとシャワー設備の魔石、後は二階の3部屋の明かり。

明かり用の魔石は天井に付いているので、全部ラアトにやってもらった、身長147センチの私に届くわけがない。

「手持ちがなくなったけど、まあいつか」

「……すまないな。後で買ってくる」

申し訳なさそうにするラアトに必要ないと言っておく。

その代わり、使い終わって石になった魔石を貰う。

ラアトが居ないときにも舐めておこうと思う。

36 食事事情

この国では屋台で食事をするのが割と普通だったりする。ワンコイン的なお手軽さで軽食が売られている。うん、タイっぽい感じ。

だがしかしー！ 私の口に合わぬ。

酸味がね？ さり気なく酸味があるのです。

さり気ないので、食べれなくもないんだけど、できれば遠慮申し上げます！

「私は自炊しますから、どうぞ食べに行ってください」
昼食に誘われたが泣く泣く断った。

朝食は一緒に食べたけど、やっぱりあの、どの料理にも酸味ってのがいけない。

2日食べ続けたらお腹を下すのです。

宿屋のご主人に頼み込んで作ってもらっていた（別料金）日本食もどきがなければ、今頃は下痢を頻発し脱水症状で瀕死が必至。

そんな寂しそうな顔をしても駄目です、一緒に食べるには行きませ
ん、自炊します。

「じゃあ、私も一緒に食べよう」

「……口に合わなかったら、今度から外で食べてくださいね」

37 温度差

オムライスひゃほーい！

野菜スープひゃほーい！

浅漬けひゃほーい！！

美味しい、やっぱりあの酸味が無いと、こんなにも美味しいのよ。
料理自体は元々スキじゃないんだけど、あれだね、必要に迫られると積極的に作るようになるもんだね。

2人分の食事を用意し、食卓に並べ食している。

私的にはとても満足ですが。

「…どう？ 苦手なら無理しないでくださいね？」

同居するなら、最初の無理が後々響くと思うのよ。

「いや、美味しい」

じーっとラートの目を見つめる。

無論、無理をして食べていないかを見極るつもりで、なのだが。
何を思ったのか、ぐぐぐとラートの顔が近づいてきて…。

「……どういつもりですか」

危つくチューされそうになったところを、ラートの顔を押しさえて
阻止する。

「むしろ、こっちが聞きたいが……」

どうにも話がかみ合わない、本当にこれからやっていけるのだからか。

38 後片付け

「明日から仕事に戻る」

食べ終わったお皿と一緒に洗いながら宣言された。

「はい、了解しました」

すすいだ皿をラアトに渡して乾いた布で拭いてもらう。というか、むしろ今日は仕事が休みだったのだろうか。

この世界の就業体系が不明なので、なんともいえませんが。

1年の日数とか、月の数え方とかもいまだ不明です。

そもそもその概念があるのかどうかすらわかりません。

今のところそれで困ったことは無いです。

「…結婚したばかりなのにすまない」

「へ？」

この世界の細かい常識とか知らないの、ラアトが申し訳なさそうにする理由もわからない。

「ええと、どうせ”契約結婚”なんだから、気にしないでいいと思いますよ？」

もう一枚すすぎ終わった皿を手渡しして、横に立つラアトを見上げてへらつと笑っておく。

社会人のスキルに愛想笑いは必須だと思っわけです。

「……苦勞をかけるな……」

不意に片手で肩を抱き寄せられ、頭のとっぺんに、ちゅーされた。

頭にチューは、謝罪方法として普通のことなのでしょうが。

まだまだこの国の文化がわかりませんので、とりあえず受け入れておきます。

39 いつてらっしやい

翌朝、ラアトと一緒に朝食を摂り、その後無事に送り出しました。

すまない、とか、新婚なのに、とか、良い子で待ってるんだぞ、とか、勝手に外に出たら駄目だ、とか…最終的には小さい子供にするような注意を玄関先でされました。

んで、別れ際にほっぺにチュー。

いや……ほっぺだけじゃなく、唇以外の顔中にされた。

この世界の新婚家庭を見たことがないが、出掛けの挨拶はきっとこれが基本形なのだろう。

いくら”契約結婚”だと言っても、ご近所さんにバレバレでは問題だし？

魔術師なんてお固そうな職業だから、きっちりそれっぽくしておきたいんだろうな、ラアトは案外真面目な人のようだ。

40 新妻（仮）のお仕事

部屋は昨日魔法でキレイにしてもらったので、掃除は無い。
あとは晚ご飯の仕込みをするくらいだろうか。
それだってもっと後でいいだろう。

いやしかし、ぼんやりしているわけにもいくまいと、仕事を探したら……。

塵や汚れは消えたけど、散らかりが解消されたわけではなかったようだ。

さすがにそこまで万能じゃないのか。

書斎らしき部屋を見つけ、大きな机の上に大量に平積みされた書籍を本棚に戻す。

また、他の部屋にあったいつ脱いだんだかわからない脱ぎっぱなしの服を回収して畳んで箆笥に仕舞う。（たぶんこの部屋がもともとラアトが寝室として使っていたんだと思う……。きつと面倒くさくなって居間で寝るようになったんだな）

この2作業で夕方になりました。

途中で軽く昼食を取り、休憩をふんだんに入れながらですけどね！

それにしてもコンビニとか無い世界でよかったよ…食べかけで腐った食料の始末がなくなっさ。

4 1 補間能力必須？

ラアトが仕事に行っている間に家の片付けをして、その間に口の中で使用済み魔石を転がしていたおかげで、使用済み魔石の半分は虹色魔石に変化完了です。

虹色魔石は自室の魔石用の袋に入れて、タンスの下着が入っている引き出しの奥に……いや、止めておこう、むしろ発見される確率が高い気がする。

一番下の段の引き出しの奥に突っ込んだ。

大事なお金の元だからね。

夕飯を作っていると、ラアトが帰ってきた。

思ったよりも早い帰宅だったから、ご飯が間に合わなかった。

「お帰りなさい。ごめんね、まだご飯ができてないから。先に
お風呂、入って？」

申し訳なさに、上目遣いで、ついでにちよっぴりカワイ子ぶって
小首なんか傾げてみる。

途端に表情を固くし、ついでに体も硬直したラアト。

え、ちよっと、そんなに似合わなかつたんだろっか？

硬直するほどのダメージ！？

「あ、あの…怒った？」

恐る恐る声をかけると、ラアトの硬直が解除され。

同時に大きな体に抱きすくめられた。

「むしろ、君がいい……」

何をどうしてそんな答えになるんでしょうね？

ラートの脈絡のない言葉から正しい意味を汲み取るスキルを得なければ…結婚生活が前途多難になること請け合いです。

4 2 転勤

訳のわからないことを言うラアトをお風呂に押し込めて、夕飯の準備を再開する。

夕飯の準備の関係上ゆっくり入って欲しかったのに、カラスの行水で出てきてしまった空気を読まないラアトが上半身裸だったのでとりあえずさりげなく観察しておいた。

うむ、魔術師なのに良い筋肉をお持ちで。

眼前で割れた腹筋や盛り上がる上腕二頭筋等々を見たのは初めてです、眼福ですね。

おっといけない、視姦するのはいけない、これからも一緒に暮らすのだから初手で警戒されては後々…げふんげふん。

煩惱を振り払うようにセカセカ動く私を、椅子に座って濡れた藍色の髪を拭きながら見守るラアト。

はつきり言って気が散る。

「いただきます」

両手を合わせてから食事を始める私と、無言で食事を始めるラアト。

半分程食べてから、ラアトの食事の進みが悪いことに気づく。

「お腹でも痛い？ それとも口に合わなかった？」

私の言葉に、顔を上げたラアトは意を決したように口を開いた。

「転勤になった」

……転勤？

「アザトール地方だ」

知りませんがな、この世界の地名なんて。

「…へ、へえー？ そうなんだー」

「急だったから蜜月も返上して勤務しているというのに」
みつけっ？

新婚期間的な何かなのかな？

「不甲斐ない夫ですまない、マモリ」

おおっ、急に名前を呼ばれて思わず心臓が一拍だけ高鳴りましたよ。

「し、仕事なら仕方ないよ、ねっ？」

動揺したのをごまかすように笑顔でフオー！。

すると萎萎しおしおしていたラァトは少しだけ元気になったようで。

「ありがとう、マモリ。それで、出立なのだが、明日の朝だ」

うん、ちょっと待て。

43 荷造り

とにかく、荷造りしなくてはならない。

閉まりかけの雑貨屋に駆け込んで、荷物を詰める荷箱を購入してきた。

「じゃあラアトさんは自分の荷物を詰めてくださいね！」

ああ、こんなことなら昨日荷解きするんじゃないかった。

昨日の箱に荷物を詰めなおす。

引越しは馬車で移動ということなので多少荷物が多くても大丈夫。

問題はラアトだ。

荷箱を持って部屋をうろろしているラアトを発見。

うむ、思ったとおり。

「じゃあ、とりあえず衣類は私が詰めますから、必要な雑貨をその荷箱に入れてください。割れそうなものはこっちください、衣類で包んで持つてくようにしますから」

深く考えないようにしながら衣類を詰め込んでいく。

時間は待つてくれないのです！ 悩んでる時間が勿体無い！

のたのた荷造りするラアトに活を入れながら、なんとか終わらせる。

くあつ！ 私の荷物は1つなのに、ラアトの荷物は10箱以上つて！

生活している年季が違うから、当然といえば当然なんだけどねっ、量が多いっ！

「それじゃあ、今日はこれで就寝っ！ おやすみなさい！」

「あ、ああ、オヤスミナサイ」

明朝出発だから、少しでも寝ておかなくてはね！
では、おやすみなさい。

4 4 時間は少々戻り、ノースラアト側の事情

虹色魔石の存在が他国に知られた。

まだ販売元マモリのことは知られていないようだが、時間の問題だろう。

「ノースラアト・リタ・ロンダットに、アザートル地方の都市エルルージュへの赴任を命じる」

別名、魔石都市。

魔石の産出量が世界一の都市である。

それ故に都市の警備体制は強固で、かの都市に入るだけでも厳しい審査が必要であり、その中心部に定住ともなると新規で入ることはほぼ無理である。

ある意味、王都よりも安全な場所だ。

木を隠すには森の中。

同時期に他に3名の魔術師、騎士が同地方へ赴任。

そして4名が王都に戻ってくる。

一見すると時期はずれの人事異動である。

マモリがどのようにして虹色魔石を入手しているかが不明なため、果たして魔石都市に隔離することがいいことなのか……議論がなされたが。

結局のところ、マモリ以外の人間の手から虹色魔石が販売されたことがないという事実を考えると。

マモリを誘拐されて強引に仕入先を割り出されるのは困る。

マモリは唯一の虹色魔石への手がかりなのだから。

「かの娘を、何に代えても守りぬけ」

「無論です、彼女は私の大切な妻ですから。命をかけても護りぬきます。つきましては、赴任先にて今まで保留にしていた蜜月休暇を取ろうと思

「そうそう、エルルージュはこれから祭典があるから例年通り忙しくなるぞ」

「いえ、蜜月休

「忙しくなるから、頑張れよ。では、旅の無事を祈っている！」

言い捨てて逃げるように部屋を出た上司に、軽い不幸が3日続く呪いを掛けてもいいだろうかと真剣に考えるノースラットであった。

45 ゴトゴト揺られて

幌付きの馬車の後ろに、毛布を敷いて座っています。

ああ、長閑のどか……。

御者席にはラアトが座り、馬の手綱をとっている。

出るまでが一騒動だった。

早朝に到着した荷馬車にひたすら荷物を運び込む。

そして、出掛けになって、ラアトが慌てて家の中の魔道具につけていた虹色魔石を回収しました。

そんなの置いていってもいいのにー。

って言ったけど、聞き入れてはもらえず、私も魔石の回収を手伝い、ひとつ残らず取り外した。

ラアトってけちんぼなのかななんて思ったけど、後から聞いたたら、魔石は個人負担なので、官舎を出る際には取り外すものなんだってさ。

そんな感じでドタバタと出発。

46 車中泊

いや、結構広い馬車だなあとは思ってたんですよ。
荷物を積んでも十分にごろごろできるスペースがありましたからね。

そうか、荷台で野宿ですか。

馬車の速度的に、次の町に着く前に日が暮れてしまっていますね。
必然的に野宿ですよ。

夕飯は家から持ってきたパンにハムとか野菜を挟んで食べた。

お馬さんは草むらの木に繫いで、ラアトが荷台に厚手の毛布を数枚重ねて敷くと、周囲の木々にチョークのようなもので印を書いた。腰のベルトにつけている小さな革の袋から、小さな赤茶色の魔石をひとつ取り出し手のひらの上へのせ。

「結果」

パキンと魔石が砕け散る。

周囲に変化は無いようなんだけれども。

「魔法？」

荷台に乗り込んできたラアトに尋ねれば、頷かれた。

「獣や野盗ぐらいならば退けられる。安心して眠れ」

獣も野盗も出るんですね……了解しました、安心して眠ることにします。

旦那様（仮）が魔術師で良かったと思います。

47 寝相は良い(自己申告)

右向きで寝たい派の私は、壁の方を向いて寝られる向かって左側を選びました。

何枚も重ねてあるおかげで、せんべい布団並の寝心地を確保してある寝床は、結構快適であります。

しかしながら、荷台なので大人二人が並んで寝ると寝返りが打てないわけなんですけれども。

大丈夫です、私、寝相は良い方ですから！ たぶん！

「おやすみなさい」

毛布を一枚かぶって背中合わせで就寝。

他人の気配が気にならないかって？ 問題ないねー！

初のローカルな旅で疲れてるから、目を閉じてちよっとすればスッコーンと夢の中。

そして、明け方。

やっぱり朝は冷えるわけでした。

でもなぜか背中から首、お腹のあたりが、温かいです。

これはあれだ、後ろから腕枕だ。

もう丸一年以上ぶりの腕枕。

元彼とたまのお泊りの時は、必ずこうやって眠った。

まあ、奴の浮気が原因でお付き合い半年で破局だったわけですから、れどもー！！

ギャンブルと浮気は許しちゃいけない、ってというのが祖母の遺言
ですから！

はっはー！ 祖母はまだまだ健在ですけれどもね！

・
・
・

ああ、もうっ。

なんであっちの世界、思い出しちゃうかなあ…っ。
それも大好きなおばあちゃんのこと。

心にしていたフタが少しだけずれてしまっ。

じんわり浮いてきた涙が、拭う前にポロリとこぼれてしまった。

枕になっているラートの袖に吸い込まれる。

止めようと思つのに、勝手にポロポロと目の端からこぼれていく
涙を毛布を引き上げてその端に吸い込ませる。

不意に、私にまわっていたラートの腕にぎゅっつと力が入り、意
思を持って抱きしめられた。

大きな体に包まれている。

自分のものじゃない体温が安堵をくれる。

何も言わずに抱きしめてくれる優しさに甘えて、その腕の中で嗚
咽を漏らして泣いた。

48 時間は少々戻り、ノースラートの事情

「おやすみなさい」

そう言つて、彼女はころんと横になつて眠りについた。

彼女の横には、一人分の寢床が空けられている。

流石と一緒に寝るわけには行かないからと、当初は荷台の外で寝るつもりだったが、彼女が気にしないのならばと、彼女が空けてくれているスペースにゴロンと寝転び、毛布をかぶる。

すうすうと、規則的な呼吸。

寝返りを打つて、彼女の方へ体を向ける。

本当に危機感の無い女性だ。

初めて出会つたのは夏の盛り。

知り合いの魔術師から聞いた虹色の魔石を売る娘、真相を知るために手の者を使って街を張り込ませ、彼女がテントを出した報告を受けて自らそこへ足を運んだ。

小さなテントの床いっぱいに、簡素な敷物を敷いて座る少女、その目の前に少し華やかな小布を広げて……虹色に光る魔石を数個、無造作に置いていた。

伝わる魔力で、それが魔石であることはわかるが、虹色というのは見たことも聞いたこともない。

狭い入口近くに膝をついて、その魔石を手取る。

恐ろしいことに、総ての属性の波動を発していた。

ひとしきりその魔石を検分してから、やっと自分を見つめる彼女に気がついた。

「……いらっしやませー」

気の抜けた声を掛けられる。

敷物の上にぺたんこ座っている、小柄な少女は少し大人びた微笑を浮かべていた（1）。

だがその時の私は、彼女よりも初めて見る虹色の魔石に興味がいっついて、布の上に出ている魔石を手持ちの金をはたいて買い漁ることしかできなかった。

その店は不定期に現れる。

ある日からテントの前に手作り感丸出しの木で作られた看板らしきものが掛かっていたが、書いてある文字は異国のものらしく読めなかった。

どうやら少女の故郷の文字らしい。

この文字を使う国に、虹色の魔石があるのだろう。
文字を写し、王宮の図書資料館に頼んでどこの国かを調べてもらった。

結果は、該当する国は不明だということだった。

何度も通ううちに、彼女の無用心ぶりに呆れを覚える。

町の警備の者に彼女をそれとなく見守るように通達は出しているものの、店が出るのに日にちが空くと心配になる。

彼女の姿をみるとほっとする。

上役から一度虹色魔石の販売者を王宮に呼ぶように命じられたその直後、例の人さらい集団の摘発があった。

兇となり捕まっていた魔術師が、同じく虜囚となった民間人の少女から虹色の魔石を託され王宮に駆け込んできた。

虹色魔石は魔術師内で極秘に周知されてはいるが、高位の魔術師しか所持していない。

下っ端の若い魔術師が手にできるようなものではない。

思い至る結果に、ぞっとした。

兇役だった魔術師に確認すれば案の定、私のよく知る彼女の特徴を聞かされる。

管轄外の件だったが、じっとしていることなどできなかった。

私があの子を守らねば、誰が守るのだと。

庇護欲などというものが自分の中にあることを初めて知った。

自覚をすればあとは行動だけだった。

人さらい組織の壊滅に、自分の管理する部隊をねじ込んで殲滅した。

彼女を守る。

無事に連れ帰った彼女が疲れて正常な判断ができないのを良い事に、言いくるめて…彼女がすでに成人していたのには驚いたが、これ幸いにと嫁にした。

私の絶対的な庇護下に。
マモリ
彼女を守るのは私でなければならない。

いつも大人びた瞳で、決してこちらに媚を売ることをしない。
人好きのする笑顔はくれるが、彼女の事を聞こうとしても上手くはぐらかされる。

もしかしたら、見た目よりも年が上なのかもしれない。

マモリが成人している女性だと知って、やはりと納得した。
弱音を吐かず、一生懸命一人で立つ強さを持つ。
そんな彼女の瞳の強さに惹かれた。

契約での結婚だと彼女は言っているが、私としては純然たる婚姻だ。

けれど、急にそんなことを言っても彼女は困るかもしれない。
何度も”契約結婚”だと念押しをするくらいだから。

けれど…少しぐらいの愛情は、有ると思ってもいいだろう？
少しは私のことを…好きだと思っていてくれるから、こんな無茶な婚姻だといえ承諾してくれたのだろう…？

下着も総て私に選ばせてくれたし（ 2 ）： 本当に名目だけの夫婦ならば、下着を選ばせるようなことはしないだろう？

マモリ、君の中に有るだろう私への小さな愛情をもっともっと大きく育てたい。

そして願わくば、彼女とふたり、温かい家庭を作りたい。

深夜、寒いのか小さな体を更に小さくするマモリに気づき、起こさないように注意しながら抱きしめる。

小さな背中を抱え込んで熱を分けると、寒さに緊張していた体から少し力が抜けた。

腕の中の温もりに癒されながら、うつらうつらしていると、腕の中でマモリが身動きして小さくしゃくりあげる声が聞こえた。

悲しい夢でも見たのだろうか、それとも郷里を恋しがっているのだろうか。

驚かさないうちにゆっくりと腕に力を込め、抱きしめた私を…彼女は拒絶しないでくれた。

48 時間は少々戻り、ノースラートの事情（後書き）

1 それは営業スマイルだ。

2 こちらの世界では結婚すると、夫婦がお互いの下着を総て選ぶという習慣がある為。独占欲と浮気防止。

49 いつもより余計に喋っ……

ひとしきり泣いてすっきりした。

うん、当分は泣くの我慢できると思う。

「これから、私たちの住む街は」

静寂をそつと破り、ゆつくりとした言葉で少しかすれた低い声が話し始めた。

「ルルージュという街を。 ……マモリも魔石を扱うなら知っているか？」

聞かれたので首を横に振る。

そうか、と呟かれたあとに優しい声で話が続けられる。

「我が国の……いや、この世界で最も多く、魔石を産出する地方だ。

我が国の貿易の要かなめと言っても過言ではない」

へえへえ、へえへえ。

「魔石は地下深くにある鉱脈から採掘するのだが、その採掘現場の入り口を守るように都市が形成されている」

社会の勉強を彷彿させますねラアト先生。

そうそう、高校の時の社会の先生はテストに100問出す鬼畜だったな。

お陰で毎回平均点ぎりぎりです、社会科が嫌いになったよ。

「地下への入り口近くには国軍の駐屯地があり、その周囲に第一の防衛壁があり、その外側に政まつりごとに關係する人間の宿舎や、富裕層が住

む第一区画がありその外側に第二の防衛壁がある、さらにその外側は商業区画と平民層の暮らす第二・第三区画があり、その外側に第三防衛壁があつて、更にその外側に第四防衛壁がある」

……脳内でドーナッツが出来上がったよ。

「要塞と言っても過言ではないだろう。王都よりも嚴重な作りだえ、ええええー」

「それでいいの!？」

思わず声をあげれば、頭の上でラアトが小さく笑った。

「王都は王都で騎士も魔術師も多く常駐しているし、ちゃんと安全は図られているから大丈夫だ。」

さあ、日が登ったようだ」

幌の隙間から太陽の光が差し込んでいる。

先に起き上がったラアトが、起き上がりかけた私を見下ろし。

「マモリ、泣きたいときはいくらでも泣けばいい。ただ……」

少し迷ってから言葉を続けた。

「泣く時は私の腕の中にしてくれ」

そう言うと、照れたように少し笑って、中途半端な姿勢で固まっていた私の唇に触れるだけのキスを落としてそそくさと荷台から降りていった。

……あ、あれ? こんなキャラだっけ? 旦那様(仮)?

お陰様で涙が吹っ飛びました。

50 町泊

夫婦ですから。
ええ、まだ蜜月中なので。
よろしく。

以上宿屋の主人と会話している時のラートの言葉でした。
だから”みつげつ”って何なんだろう…。

そして通された部屋は1つで、ベッドは2つだが…なぜかくつけておいてある。
ラートに手伝ってもらって、ふたつに分けようとしたら拒否された。

「泣くときは」

「もう泣きません、そんなに泣き虫じゃありません」

「夜は冷える」

「馬車で使ってた毛布も持ってきたから大丈夫です」

「……………」
「……………」
「……………」

結局、一緒に寝ることになりましたよ、絆されたと言いたければ言う方がいいー！

昨夜手を出されなかったという実績もあるので、一応信じる事にしました。

手を出されたところで、三周りくらい体格差があるので、よっぼどナニがあれで無い限りちょっとやそつとじゃどうにもならないと思っわけです。

近くにある大衆食堂で夕飯を食べて、同じく近所にある銭湯でひとつ風呂浴びて就寝。

先にベッドに入って、私の事を待つラートの腕の中に滑りこむには若干の抵抗があったが、今更なので彼の腕を枕にころりと横になる。

勿論ラートが背中に来る体勢で。

…。
なんだかんだ言っても、やっぱり他人たひとの体温というのは良いね…。

51 無事到着

初日以降野宿はなかったものの、丸4日掛かる行程を3日に短縮して魔石の街ルルージュに到着しました。

「噂に違わぬ要塞っぷりですね」
街一つをぐるりと取り囲む壁を目にして感心する。

馬を引きながら隣を歩くラートを見上げると、そうだな、と同意されて頭を撫でられ、そのまま肩を抱かれて頭のとっぺんにキスされる。

これが一連の動作として、流れるように繰り出されるのです。
何というスキル……っ！

同衾どうきん（Hはしてないよ、一緒に寝てるだけだよ）するようになってから、スキンシップが若干増えた気がします。

まあ、目に余るような行為は無いので、彼氏でもできた気分ですることになります。

名目上は旦那様なんですがね。

外見はストライクとは行かなくても、好ましい感じだし。

私のことを大事にしてくれるみたいだし？

過去お付き合いをした人たちは、向こうから告白してくれて始まった関係ばかりで、友達期間も無くお付き合いになった事もあるわけで……付き合っちゃえば、愛情も湧くものです。

まあそういうことです。

52 新居へ

「……………おやこ？」

そう聞きたくなるのはわかります。

この身長差なので私もそのように見られる自覚はありますし、今まで通ってきた町でも似たような反応でしたから。

でもラアトは違うようで、ギロリとした視線で門番を睨みつけている。

「夫婦だ」

地を這う声、引きつる若い方の門番。

「失礼致しましたっ！」

慌てて頭を下げさせる、年上の門番。

無事門を通りながら、横を歩くラアトをちらりと見上げる。

…………… 大人気ないなあ。

私の心の声が聞こえたのか、私の視線に気づいただけか、ラアトがこちらを見下ろす。

「どうした？ 疲れたなら荷台に乗るか？」

気づかってくくれるラアトに、多少大人気なくてもいいかな、と思ってしまう。

「大丈夫、歩きます」

へらつと笑って前を向くと、頭をグローブのような手でそっと撫でられた。

門を3つ潜り…ってことは、官舎と富裕層の住む地域だね。

一般居住区域もそうだけど整然と区画整理されている。

内側に最も近い区画に建つ、同じ建物が並ぶ一つの前に馬車を泊めた。

「ここだ」

家に番号がふつてあるので間違えなくていいねー。

番号以外はまるつきり同じ形だから…迷子になりそうだけど。

そして、デジャブ既視感。

誰も住んでなかったのか？ いや、生活していたらしい痕跡はある。

一階の玄関から居間、トイレ、シャワーのみに。

この生活動線は……。

ちろりとラフトを見上げる。

まあ、先住民に思いを馳せるのは止めておこう、会うことも無いだろうし。

家に入る前に、肌身離さず持っている小袋から2センチ程の虹色魔石を取り出しラフトに渡した。

53 ウィンドウショッピング

この街に来て1週間（この世界の歴はまだよくわかんないので、日本式で）ご近所さんは三軒右隣にご夫婦が居て、その間の二軒は独身者らしくまだ会ったことが無い。

三軒隣の奥さんは四十代位に見えるおっとりした気の良さそうな方で、日中ラウトが仕事に出てから引越しの挨拶に伺ったときにお茶を頂いてきちゃった。

さて、本日もお買い物ー。

門をひとつ越えて、市民街に入る。

家のある区画にも商店が有るにはあるんだけどねー、高いんだよねー。

品質の良い物を揃えてるんだろうけど、ちょっと敷居が高くて未だ入れない。

そんなわけで、足を伸ばして市民街。

魔石の街だけあって、魔石関連グッズはやたらと豊富です。

宝石店も多いし、魔石を使用する家電製品も種類が豊富。

ウィンドーショッピングするだけでも楽しい。

んで、ここんどこ気になる物があるんですよ。

なんなんだろうこのチヨーク…。

シヨーケースに並べられているチヨークらしきものをまじまじと見る。

チヨークよりも硬そうで、先が細くなつてて書きやすそうなんだけれども。

値段がね、魔石よりも高いのよ、10センチくらいの長さ1本で

虹色魔石の大粒1個よりも高くても10万ですよ。

こんなチヨークが……。

そういえば、野宿したときにラアトが結界張る時に使ってたっけ。

というわけで、帰宅したラアトに聞いてみました。

「ああ、記術棒か。魔力を込めることができる特殊な素材でできているペンで、魔法を使う時の補助として使ったり。あとはそうだな、魔道具の……」

言って近くにあった魔石ランプをひっくり返して、底の部分を開いて見せてくれた。

おおう、何やらみっちりと書かれています！

「要約すると『魔石が有る時に魔力を循環し、スイッチ部が押されている場合は魔力を通してランプに明かりを灯しスイッチ部が押されていない場合は魔力を切る』と書かれているな」

え？ ええええええ？

「もしかして、他の魔道具もそんな感じなの？ 言葉で魔力を制御してる感じ？」

「そうだな。ああ、勝手に基部を開けるなよ、複製を禁止するために電撃が流れるようになってるものがほとんどだから」

怖っ！

54 記述棒

記述棒の存在と家電製品の仕組みを覚えてもらった。
大変興味深いです。

特に、記述棒で目的の現象を指定する魔術式を書ければ、魔力は
必要ない、ってところとか！

翌日ラートを仕事に送り出した後、朝一番に記述棒を買いに行っ
た。

だが簡単に購入することはできなかつた。

まず第一に、子供が来る所ではないと追い返された。

食い下がると、誰の紹介で来たのか聞かれた。

紹介者ではないが、魔術師の身内であることを伝える、ラートが
魔術師なので顔パスしないかという思惑を込めて。

勿論ラートに迷惑を掛ける訳にはいかないから、名前は出さずに。
魔術師の身内でもダメだと言われ、それならば魔術式記述資格者
証はあるかと問われたが、有るわけがない。

「お嬢さんはまだ知らないのかもしれないがね、魔道具を作るには
ライセンス
資格が必要なんだよ。」

誰も彼も魔道具を作るわけではないんだよ、危険だからね。わ
かったら、ちゃんとお勉強をして資格を取ってからまたいらっしや
い」

店を閉めだされた。

あからさまに肩を落としていると、魔道具店の横の路地から、小さい子が私に手招きしていた。

それだけならば、無視をしたんだけど、その子は手の中にこつそりと小さな記述棒を持って、私にだけ見えるようにそれを振ってみせた。

私は誘惑に惹かれるように、その子の元へ近寄っていた。

55 実験

私を呼んだ女の子は、すり減りすぎて捨てるような記述棒を拾ってきて、それを売って稼いでいるのだと言った。

滅多に買う人はいないけど、たまに私のような人間に売れることがあるのだという。

これでお父さんにお薬が買える、とか言っていたがスルーしておいた。

うむ、私が地を這っていた時に手を延べてくれるような人も居なかったわけだしな、家族が居るなら手を取り合って生きればいいさ。

私は少女からチビた記述棒を2本購入した。

少女と別れた後、工作に使えるそうな物も雑貨屋で購入。

購入した記述棒が真つ当なものではないのは理解しているんだ、
だけどね……。

背徳感に後押しされて半ば駆け足で帰宅した。

居間のテーブルに材料を広げる。

昨日、ラアトに家電の『魔術式』を読んで貰ったときに閃いたことがあるんだ。

電池切れの魔石をこっそりと口の中で転がしながら、工作にとりかかる。

まずは初歩的なところから。

黒く塗装された木の板の上に金具でガラス板を取り付ける。
ガラス板からくいーっと記術棒で線を引いて、下方に空けておいたスペースに引っ張る。

あ、あと、魔石を嵌める場所も作つてと。

そつちからも線を引く。

そつしてから、先ほどのスペースに記述。

『“ ガラス・発光”』

小さい虹色魔石を魔石スペースに嵌めると、ガラスが眩しく輝いた。

魔石を外したら、光は消えた。

成功。

呆気無い程すんなりと成功。

良かった！ 日本語通じたよ！ 意味さえちゃんと有れば問題ないのね！？ そうなのね？

よしよし、調子づいてこれにスイッチを足す。

『“ i f (” スイッチ・o f f ” , ” 魔力o f f ” , ” ガラス・発光”) 』

意味としては、もしもスイッチがオフの時は魔力もオフ、それ以外の時は発光する…という、表計算ソフトで使用する関数の式だ。

魔石をセツトして、スイッチをオンオフしてみると、バッチリ！

！！！！

うっしやー！よしよしよしっ！

じわじわと達成感が湧いてくる。

そうそう、ややこしい関数が正しい答えを返す時が一番嬉しいんだよね。

「ふふふふー、事務歴3年の能力^{ちから}を見せてやるわー」。

56 怒られた

「……ただいま」

「あ、お帰りなさい」

居間のドアを開けたまま固まるラァトに、挨拶を返すが…工作に夢中で、夕飯作るの忘れてた。

「ごめんね！ いま片付けて、ご飯作るからっ！」

製作途中で出たゴミはあらかじめ片付けてあるので、あとは完成した作品であるライトを退かすだけ。

出窓に一時退却させていると、ラァトがそのライトを取り上げ、しげしげとそれを眺めている。

「マモリが作ったのか？」

「案外なんとかなるもんだね。ほら、式を継ぎ足して、このパネルをタッチしたら色が変化するようにしてみたんだけど、面白いでしょ？」

言いながら、金属部分をタッチして、赤・青・黄色・緑・橙・消灯と変えてみせる。

「……」

あれ？ うけなかった？ あんまり実用性無いからしょうがないか。

じゃ、こっちはどうかなあ。

「あと、ここについてるダイヤルを回すと光量が調節できるんだよ。実演してみせる。」

最大光量は眩しすぎるけど、ダイヤル3ぐらいだと夜道を歩くのに丁度いい。

「……」

むむむっ、これは結構実用性がある機能だと思ったんだけど。

「確認するが、これはマモリが作ったのか？」

硬いラートの声が確認してくる。

「はい、まだまだ荒削りだけど、仕組みはわかったから、次からはもっと完成度の高いの作ろうと思…」

って、家事をおろそかにしちゃダメだろう私ーっ！

「ごめんなさい」

調子に乗りすぎました、ごめんなさい。

シヨボンとした私をソファに座らせたラートは、自分も私の隣にすわって、半身をこちらに向けたので私もラートの方を向く。

ラートは私の両手を取って、本来ならば魔道具は工房に師事して術式を教わるものと言った。

えええ？ だって、あんなに簡単にできるのに？

「……簡単ではない。魔道具の構造を知らねば出来ぬものだ」
へえへえ……？

首を捻る私に、ラートは小さくため息を吐く。

「それに、もしも魔道具が不完全なもので暴走でもしたらどうする。実際そういう事故で年に何人も怪我をしたり…死んだりすることもあるんだ、だから無闇に魔道具を作ってはいけない」

そんな簡単に暴走とかするんだらうか？

だがまあ、ここは素直に承諾しておこう。

「わかりました…自重します」

その日の晩御飯は久しぶりに外に食べに出ました……酸味が…酸味が……。

57 下書きは重要

「いってらっしゃい。今日も早く帰ってこれる？」
お見送りをする私の頬にキスを落としたラアトは、今日は遅くなりそうだとの答えをくれた。

家に戻ると大急ぎで家事を終わらせる。

掃除、洗濯、夕飯の下準備 その他諸々の雑事。

そして、筆記用具を持ち出す。

ええ、昨日の続きですよ、むしろ今日からが本番です！

昨日何回か失敗した事で、反省したのよ。

ぶっつけ本番で書くと、関数を間違えた時大変危険であるよね。

そうして気がついた、最初に別の紙に下書きしてからチェックして、清書すればいいのだと。

本日は急務であつた別の空間を作つてそこに物を保存する為の式を考える。

急がなきゃならないものは他にもあつて、監視の目をくらます、あるいは存在自体を感知させなくする為の式。

物理的に捕まえられないようにするために、摩擦係数を限りなく0に近くする式も欲しい。

どれも、面倒くさい式になること請け合いなので、一つ一つじっくり取り組もうとおもう。

隔離空間を急ぐ理由は、虹色魔石が関係する。

もつそろそろ、どうやって仕入れているのかが問題になっているだろう、いや、むしろもうなってる。

自家生産していることは永遠の秘密なので、言い訳が必要だ。

それにはコレが重要なのである。

・異空間の作成。 空間サイズの指定と、中身の時間を停止させる効果を付随する

・出し入れ時、任意のものを取り出せるように、検索を掛けられるようにする。

・盗難対策として、個人認証をする。

・魔石の魔力切れの際に空間が消滅するかもしれないので、実際にどうなるのか検証をしておく。 あるいは魔力切れを起こす前に警告がでるように設定する。

どうよ、ちらーっと考えただけでこれだけ出てくるのよ、面倒くさい式になることがわかるでしょうよ！

式に必要なと思われる機能の箇条書きを見て軽いため息が出たが、やらねばなるまい。

何度も何度も書きなおした。

そして、関数式じゃ無理だということを実感した。

だがしかし！ こんな事でへこたれるような事務人間じゃありません、卒業した高校の商業科では情報処理の科目が必須なんですよ、

幸いここでは文字のもつ意味が重要であって、英単語で記述しないでも大丈夫なのであるわけだから。

ポーチ内に異空間Aを設定する

異空間A" (size) (100*100*100) (空間内の時間停止)

ポーチを開く

保有者を認証する

"if (保有者" マモリ" 異空間Aへ ポーチ内へ)

検索窓を開く

視認は保持者のみ

窓位置"ポーチ横

キーボードの表示

*"ワイルドカード

検索ワードを受け付ける

"if (YES / 保有者の手元に対象物を移動" / 対象物は
ありません")

ポーチを閉じる、異空間Aを保存して終了

式…色々混ぜてるけど大丈夫かな。

それにしても基本だけで、こんだけ……。

あとは、これを実行したときに出てきそうなエラーを予測して言葉
葉を足さないといけない。

手を突っ込んだ時に時間を止めてある異空間に手を囚われるとか、
洒落にならないですね、ふふふ…。

58 ポーチ完成

結局三日間下書きと実験に費やした。

そして清書に一日。

実験の産物として、異空間につながってるだけのポーチが1つ、空間自体は50センチ六方なので大きくはないんだけど、こちらから中は見えず、時間の固定をしてあるだけなので怖くて手を入れて取り出せない、取り出す時は逆さまにして振るといふ強行手段しかない、メリットは異空間に保存するので、入れたものの重さが無いということ…空間の数値を書き換えて大きくして無限ゴミ箱として使える優れものです。

他にも盗難防止の防犯ブザー的なもので、私以外の人間が持つと鳴り続ける鈴付きストラップとか。

四日間昼食もろくに摂らずに頑張ったお陰で、なんとか完成したポーチがここに！

私がいづも魔石を入れて持って歩いているポーチだ。
革製で腰のベルトに通せる優れもの。

ポーチを一度ばらしてから記述棒でみっちり式を記入し、その上から薄い革を貼りつけて擦れて消えないようにしてもう一度縫い直した。

ポーチの横に作った小さなポケットに虹色魔石をセットすれば、魔道具として起動する。

ドキドキしながら魔石をポケットに入れる。

起動したからといって、一見なにも変わらないので実感が薄いけど、

問題はここからだ！

ポーチのスナップを外し、フタを開く…同時に検索窓が現れた。
よしよしよしっ！！

小さくガッツポーズをしながら、次は検索だ。

手元に現れた主要キーしか無いシンプルなキーボードで * を
入力してエンターを押し、中に入れたものを総て表示させる。

まだ何も入っていないので、現れた一覧表には何も表示されない、
よし、これもオツケーだ。

次にポーチに小さめの魔石と中くらいの魔石を一つずつ入れた。

表示させたままだった一覧表に”虹色魔石（小）：1”と”虹色
魔石（中）：1”が表示された。

なんとというレスポンスの早さ！

よしよし、じゃあ、魔石小を選択して個数を指定。

命の危機的ドキドキ感だよ、手、入れて大丈夫だろうか、いや、
大丈夫だよね、とりあえず小指を…。

よし、小指よしっ！

そろそろ指先からポーチに手を突っ込んでゆく、手がすっぱりと
ポーチに入ったが異常なし、その指先にコツンと固いものがあ
ったのでそれを掴んで手を引き出す。

「　　つく！　　やったあ……」

手の中にある小さな魔石を握りしめ、感動に打ち震えた。

こうして保身の第一歩が達成されたのであった

むふふん！

59 本気の怒り

出来上がったポーチに色々なものを入れたり、キーボードで空間サイズの変更をしたり、異空間に腕を肩まで突っ込んで中をぐるぐるかき混ぜたりして、遊…じゃなくて、動作確認！

「 マモリ」

ぎくり……。

聞きなれた低い声に名を呼ばれて硬直した首を、無理やり居間のドアに向ける。

「や、やあ、お帰りなさいませ。 きよ、きょうは、早い、ね？」
さりげない動作で試作のポーチとストラップを後ろに隠しながら、ラアトにお帰りの挨拶をする。

完成品のポーチは腰にあるから、むしろ隠さない方がいいだろう。
い、嫌だなあ、その目。

ツカツカと近づいてきたラアトに背中に隠した腕を囚われる、勿論手の中には実験の成果であるポーチとストラップがあるわけで。

手を片手で掴まれたまま、物を取り上げられる、けたたましく鳴る鈴にラアトの眉間にシワが寄る。

ギシツと、腕を握るラアトの手が強くなった。

ラアトが手にしていたストラップをテーブルの上に放り投げると、音がやんだ。

握られた腕が、痛い、痛い、痛い。

「何をしていた」

ひいひい

地を這う声、剣呑な眼光、怒り心頭のその表情。

気を失うかと思いましたが、いや、いつそ気を失いたかった。

「っ……ごめ、なさっ」

青痣になるのが確実の腕の痛みを堪えながら、謝る。

「何をしていたかと聞いている」

低い、低い、低い声。

ぴゃああああっ

泣いてもいいですか！？ 泣いてもいいですか！？ 泣かないけどねっ！！

「ま、魔道具を作って、ましたっ」

歯を食いしばって痛みとか諸々を堪えて答える。

泣いてたまるかー！

「前に、私が何と言ったか覚えてるか」

「ご、ごめ…っ。 お、覚えておりますっ」

反射で謝りかけたら鋭く睨まれ、慌てて言い直す。

「何と言ったか復唱してみる」

怖っ！！ 超怖っ！ 視線で殺される！

「ま、魔道具を作るのは危険を伴うので、作ってはいけないとっ
「そっだ」

ちゃんと答えたのに、なんで腕を握る力が増すんですか！。

泣くっ、もうそろそろ限界っ。

「不用意に魔道具を製作し、暴走する事故が過去に何度もあった、
無論今もある。 死ぬことだってあるんだっ」

ミシッ

骨が軋む音が聞こえました。

反省とか反省とか反省とかもうそんなのどうでもよくて、とにかく

く腕を離して欲しいっ！

もう、ラアトが何言ってるのか痛みでわかんないっ！

我慢の限界がきて、私の左腕に食い込んでいるラアトの指を必死で剥がそうと足掻く。

痛みで涙がボタボタと零れ落ちる。

がむしやらにラアトの手から逃れようと暴れて、足でラアトを蹴る。

多分、攻撃が決まったとかじゃなくて驚いて正気に戻ったんだと思う、緩んだラアトの手から腕を取り戻したが消えない痛み、床の上に膝をついて腕を押さえて痛み悶える。

痛い、痛い、痛い、痛いっ

腕を抱えて背中を丸めた私に、ラアトが狼狽している。

「だ、大丈夫か？」

ビクビクした声に、私の脳の片隅でカチーンと音が鳴った。

「大丈夫なように、見える？」

ぎりつと奥歯をかみしめて、涙でボロボロの顔を上げる。

掴まれていた腕は真っ赤に腫れあがり、骨折ないしはヒビが入ってるんじゃないのか！？

ありえない。

制止するラアトを振りきって自室に逃げ込んだ。

新居に引っ越してきて初めて自分のベッドを使いました。

怒りに任せて、マモリの腕を負傷させてしまった。

手当をしようにも、近づかせてくれない。

痛みに涙を流しながら、手負いの獣のように警戒する。

「マモリ、頼むから、手当だけ」

「要らない！ 私に近づかないでよっ」

腕をかばいながら、ジリジリと逃げるマモリ。

その距離を強引に縮めたほうがいいのだろうか、それとも少し冷静になるのを待つべきか。

逡巡している間に、隙をつかれて部屋に逃げこまれた。

「入ってこないでよっ！ ラアトなんて大っキライっ！！」

ドアの前に立った瞬間に怒声がドアの向こうから投げつけられ、暫くすると中が静かになった。

部屋のドアをそっと開けて中に入る。

マモリは目を閉じていた。

眠っているのか、気絶してしまったのかはわからないが丁度いい。

ベッドに近づき変色して腫れ上がっているマモリの左腕を出す。

いつも自分の腰に下げている袋から大きめの虹色魔石を取り出して右手に握りこむ。

治癒系の魔法は苦手だが、そうも言ってもらえない。

ベッド脇に膝をつき、マモリの左腕の上に魔石を握りこんだ右手

を掲げる。

「復元」

怪我を治療するための言葉を詠唱すると、魔石はパキッと音を立てて砕け散り、指の隙間からこぼれ落ちた。

だが、マモリの腕の腫れは引かない。

失敗したようだ。

もう一度魔石を取り出す。

深呼吸し、もう一度詠唱する。

「復元」

魔石が呼応するように鈍くひかり……少しだけ腫れは引いたようだが、完治とはいかない。

負傷の為に発熱を شدしたマモリ。

合計5個の虹色魔石を使って、なんとか「復元」を成功させたが、自分自身の魔力も手加減せずに消費した為にもう動く気力がない。

「慣れないことはするもんじゃないな」

自嘲がこぼれてしまう。

戦闘系の魔術ばかりを伸ばすのではなくて、不得手な分野も訓練しておくんだっとな。

すっかり腫れも引いたマモリの左腕をひと撫でする。

上がっていた熱も、腕の負傷が癒えた今は落ち着いたようで、苦しそうだっただ寝息も健やかなそれに変わっていた。

そっと握っていた手の指先に口付けてから、毛布の中にその手を戻す。

ベッドの側面に背中を預けて座り込みながら、カーテンの隙間から空が白んでいくのが目に入ったが、魔力の使いすぎで体が重く腰が上がらない。

体が眠りを欲していた。

61 喉元すぎればなんとやら

手が、治っていた。

普通に目覚めて、普通に起き上がって、ハッと気がついてなぜか砂が積もっていた左手を持ち上げてグッパーグッパーしてみる。

異常なし！！

昨夜は痛みで気絶するように眠りについたのに、なんで？

なんで、の理由はベッドの下にありました。

ベッドの下のフローリングに、ベローンと寝そべっているラアトを危うく踏んでしまうところでしたよ！

文句の一つも言ってやろうとベッドを降りてラアトの前にしゃがみこんだんだけど……。

真っ青な顔で眠るラアトに、文句が引っ込んだ。

もしかして……看病してくれた？

というか……治してくれた？

魔法で、治してくれたの？

魔法で治せるんだ！？ 凄い！ 是非とも覚えてみたい！

若干興奮してしまっただが、青い顔をしているラアトを思い出す、興奮している場合じゃなかった。

酷く具合の悪そうなラアトを床の上で寝かせてられないよね、どうやって移動させよう。

なんとかベッドの上に持ちあげられないものかと、リアトの上半身を持ち上げるべく手を掛けようとすると、パチリとリアトの目が開きガバッと起き上がり、起き上がったと同時に一瞬ヤラれそうな鋭い眼で見られたが、私と認識したと同時に視線が一気に柔らかくなった。

「腕の調子はどうだ？」

「おずおずと聞かれる。」

「リアトが、治してくれたの？」

「確認すると小さく笑みが返された。」

ベッドに凭れて青い顔をしているリアトを無理やりベッドに寝かせる。

「いつもパンー（ひびく）で寝てるので、寝にくいだろうと服も剥ぎとってしまおう。」

「軽く抵抗されたが、いなして剥いた、げっへっへっへ。」

毛布を肩まで掛けてポンポンと叩く。

「しっかり休んでね」

今日がお仕事がお休みの日でよかった、魔力は体を休めれば回復するということだから、ぐっすり寝てもらおう。

「…………マモリ…少しだけ、一緒に寝ないか？」

恥骨に響く低く甘い声（誇大表現）に誘われて、すんなりとその腕の中に収まったのは、あれだ。

二度寝が大好きだからです、他の下心なんて無いのです。

え？ 負傷させられた件はもうイイのかつて？

だって、曲まがり形なりにも夫婦で、今後も一緒に生活をしなきゃならないんだから、1回こんかい目は大目に見ることにした……こんなにげっそりしてまで怪我を治してくれたし、そもそも私が原因だしね。

でも、もしも二回目があったりしたら、逃げることも視野に入れなきゃならないかなあ？

いつでも身動きが取れるように、準備はしておかないといけないね。

淡々と必要な準備を考えてるだけなのに、ずきずきと胸が痛んだ

62 囁き

あつたかいなあ、むふふふ。

腕が太いから枕としてはイマイチだけど、暖かさは文句なしです。後ろから抱きしめられて、少し胸をときめかせながらもおとなしく目を閉じる。

「マモリ」

低い声で名前を呼ばれて、目を開く。

「なあに？」

返事をするがそれに答える声は聞こえてこない。だけど、ラアトが起きているのはわかるので、静かに待つ。

「マモリ…」

回されている腕に、少し力が入る。

「君に、好きだと伝えてもいいだろうか」

耳に直接流しこむように、吐息さえ聞こえる距離で囁かれた。

63 応え…？

君に……好きだと、伝えても、いいだろうか

ええと、それってもう伝えてるじゃんってツッコミを入れたほうがいいんでしょうか！？

動揺している私の沈黙に、私を包むラートの腕が強くなる。

これは、実質的な告白だと思うのですが、ほ、本気なのかな。本当に私のことを好きだって思ってくれてるの？

だって、虹色魔石を確保する為だけに結婚したんだよね？私を守ってもらっただけに結婚に承諾して……。

なのに、好きだなんて言っているの？
本当に私の事が好きって……。

息が詰まって、さっきまで冷静だったはずの頭がくらくらする。
胸が熱くなるのはなんでなんだろう。
これがこたえなんだろうか……。

そう思うのに、声が出ない。
ええと、なんて返事すればいいんだろう？

不意に私を抱きしめていた腕が緩み、小さなため息が聞こえた。

「……悪かった」

腕が離れる。

ラアトが起き上がり、ベッドを降りようとする。

え？ え？ えええ！？

ちよ！ ちよ！ ちよつとー！

「ちよつと待ったあああ！ー！ー！」

ベッドから降りようとするラアトを体当たりで引き止める。

立ち上がりかけていたラアトの腰にタックルです。

ストンとベッドに座ることになったラアトを、逃すまい！ と座ったラアトの膝の上に向かい合わせで座る。

膝の上にいるのに、目を合わすのに上向かなきゃならないってどうなのよ。

突飛な私の行動にラアトの目が大きく開かれる。

ああもつっ！

「いいよ」

キッパリと言う。

「……………」

なのに、なんだその沈黙は。

”スキって言って、いいよ”って言えば通じる？

でもこれじゃ、不遜すぎるよね。

そうじゃなくて、そうじゃなくて！

ラアトの裸の上半身にぎゅっと抱きつき、至近距離で見上げる。

”私も、好きって言うても良い？”

のど元までせり上がっていたその言葉を、私は咄嗟に飲み込んだ。

気付いたのだ、間一髪だったかもしれない。

ラアトを跨いだ太ももにあたる、硬質な物体X。エックス

！？なんなのそのサイズは！？

ダメだ、こんな場所（ベッドの上）でこんな格好（ラアトさんば
んつー丁、脱がせたのは私だけ）で！

このまま始まってもおかしくありません！

ええ、ええ！　そうですとも！

いい年をした大人です、思いが通じあえば、体も通じ合いたくな

るというもの。

ですが、無理です。

ソレを受入れるキャパシティは、持ち合わせておりません。

冷静に分析を行った結果、突発的に発しそうになった言葉はお感入りし。

目下の課題は、現状をどのように打開するかに尽きます。

64 時間は少々戻り、ノースラートの事情

立ち上がりかけたところを妨害されて、あっけなくベッドに尻餅をついた膝の上に、ふわりと、小柄な彼女が乗り上げた。

向かい合わせになり、見上げてくる。

目が潤んでる。

可愛い

思わず見つめていると。

「イイヨ」

彼女がそう言った。

イイヨ……

この体勢で、いい、ということ……思わず、ゴクリと唾を飲んでしまった。

カアツと体の奥に熱が集まってくる。

抱きしめようとしたとき、マモリがもう一度口を開く。

「好きって言うって良いよ」

そう言って、ぎゅっと抱きついてきた小さな体、有り体に言えばふんだんな柔らかさを持つ彼女の2つの胸の膨らみを感じて、熱を集めはじめていたソコが一気に。

更に何か言おうと、私の胸元から顔を上げたマモリだったが、開きかけた口のままに、時を止めた。

……。

ギギギツと音でもしそうな動きで腰を引き、そのまま私の膝から降りる。

そこから先は素早かった（彼女にしては、だが）。

「ご飯を作らなきゃと、棒読みで言い。」

私の顔色がまだ悪いと無理やりベッドに寝かせ。

慌ただしく部屋を出る足音と、少し乱暴に閉まるドア。

「ぶっ！ ……く、くっくく」
抑えようとしても、漏れる。

ああ、なんて可愛いんだろう。

それにしてもだ、確かに彼女が危惧するように、彼女と私の体格差は大きいな。

そちらの対策も立てつつ、ゆっくりと彼女の心を掴んでいこう。
幸い、彼女は私の奥さんだ。

毛布の中にしまわれていた手を出し、目の前にかざす。

右手にはもうマモリの腕を握っていた感触は残っていないが、罪の意識が残っている。

感情が暴走した……。

記術棒・魔道具・誤記・魔道具の暴走

フラッシュバックする記憶。

忌まわしい、あさはかな行動による事故。

失われた兄の半身。

上げていた腕を目の上におろす。

暫くそうしていたら、そっと部屋のドアが開き、マモリがひょこりと顔を出し朝食をどこで食べるか聞いてきた。

「ご飯できたけど、ベッドに持ってこようか？」

先ほどのことなど忘れたかのようなマモリの態度が私を癒す。

台所に向かいながら並んで歩くマモリの頭をそっと撫でた。

65 まあまで、冷静になろう

ああびつくりした！

腰に当たったサイズに驚いて逃げちゃったよ。

台所の椅子に座ってテーブルに突っ伏し、頭を冷たいテーブルにくっつけたまま、目の前に置いた左手を握ったり開いたりしてみる。少しの痛みも無い。

そして、体を起こしてポケットからハンカチに包んだ砂を取り出す。

ただの砂に見えるけど、目が覚めた時これが私の左腕にこんもりと乗っていた。

状況的に言って、これは魔石の成れの果てだろう。

今までに数度見たラアトが魔法の補助につかった魔石も砕けて砂になっていたし。

それにしても、一体何個の魔石を使ったんだろう、1個や2個ではない量だ。

魔法は難しければ難しい程魔力の消費が大きくなるものらしい、魔力の消費が大きいってことは魔石もたくさん消費されるといふことだ。

私の腕を治すのに、大量の魔力を使った事は想像できる。

魔石だけでなく、ラアト本人もあんなに疲れ果てる程なんだから。

とにかくラアトが早く元気になるような、スタミナのある朝食にしようか。

それとも胃に優しいものにしておこうか。

ラアトにごめんなさいを言ったほうがいいのかな。

それとも怪我と相殺して、何食わぬ顔でスルーすべきなんだろう
か。

迷いながらご飯を作り終え、部屋のドアをノックして少しだけ開
けた隙間から顔を出す。

「ご飯できたけど、ベッドに持ってこようか？」

少しバツが悪かったけれど、なんでもない風でそう聞けば、ラア
トも何でもない様子で下で食べると返してきた。

一緒に台所へ向かう、半歩後ろを歩く大きな存在感は、決して威
圧的ではなくて私の歩調に合わせてくれる優しい存在だ。

いつか……彼に、本当のことを全部話すことができるのだろうか。
それとも、このまま墓の下まで、私は私の秘密を一人で背負って
いかなくってはならないのだろうか。

ちらりと見上げれば、視線に気づいたラアトが、小さく口の端を
緩めてその大きな手で私の頭を撫でてくれる。

この世界で一番私に近い人。

66 朝餉（むしろブランチ）

さて、魔道具を勝手に作ってしまった私ですが、結果を申しますと何の罰もないそうです。

「……………そういえば、マモリは異国の人間だったか」

そういえば、そういう設定でしたっけ？

自分から異国云々って言った覚えは無い気がするんだけど、ラアトがそれで納得するならそれでいいや。

異国人でこの国の法のことを良くわかってない私に教えてくれました。

うん、今後も異国人設定でいけば色々便利かも。

さてラアトが教えてくれたことを要約してみると。

- ・ 記述棒を購入するには資格ライセンスが必要である。
- ・ 魔術式記述資格者証を得るには、金を積んで師匠に弟子入りをし、師匠から認められ、魔道具協会の行う資格試験に合格する事が必要である。
- ・ 資格を得た後は、師匠の下で修行を続けるもよし、独立するもよし。

・ しかしながら、魔道具の不正販売については罰則があるが、魔道具を自主制作し自分で使う分には罰則がない。（自動車が敷地内ならば無免許でも問題ないのと同様）

そんなわけで、とりあえず罰はなかったのですが。

「年間何人も人間が魔道具の製造で怪我をしたり…場合によっては死んだりしているんだ。だから、頼む……………」

テーブルの上に置かれたラアトの手がギュツと握りしめられた。

真剣なその表情に気圧されて思わず頷いてしまった。
……本当は魔道具に未練たらたらなのに。

「それで、記述棒はどうやって手に入れたんだ」

おおぅ…っ！

食後のお茶を飲みながら、ラアトに突っ込まれて視線が宙を舞う。

「まさかとは思うが、私が何処かに落としていた…か？」

不安気に聞かれて首を横に降る。

「落ちてないよ」

むしろ落としてくれたら有り難いんだけどね！

「実は、街で買い物をした時に見知らぬ女の子から買いました」

素直に教えるとラアトの目がスウッと細められ、購入した際のことを根掘り葉掘り聞かれましたので、すっかり告白しておきました。
このラアトのお仕事モードの眼光の前に隠しことができる一般人は少ないと思うのですよ。

今日はお休みだったはずなのに、急に用事が入ったからと仕事に行くラアトを見送りました。

行ってきますの出掛けのキスが頬じゃなくて唇にチュッに変更になりました。

まあ、良しとします。

67 買い出し

冷蔵庫とにらめっこしても食材は増えません。

それはもう、日本に居た時からわかっていることなんだけれども。

魔法があるんだから、勝手に食品が増える冷蔵庫があってもいいじゃない……良くないな、農家さんに怒られそうだ。

荷物を入れるカゴとマイバッグを持って、市民街へと繰り出す。

ひと通り食材を買い込んで、雑貨屋にてシャンプー（固形）とリンス（液体）を購入して帰路へつく。

記述棒を売ってるお店の前を通る時に、つい未練の視線を送ってしまうのは致し方ないことだと思います。

記述棒を不正入手するのは諦めるけど、魔道具を作ること諦めたわけじゃないから、地道に式を作っていこうと思う。

いいじゃない、どうせ記述棒は手に入らないんだし、趣味の一環としてならさ。

日本語で書いてるから、この世界の人には何のことやらわからないだろうし。

ああそうだ、紙も買っていこう、お高いけど王都で貯めてた貯蓄もあるから大丈夫。

雑貨屋に戻るためにぐるりと踵を返したとき。

「お嬢さん」

低い声が路地から聞こえ、思わずそちらを振り向いてしまった。

路地の影になる場所で灰色の髪をしたせむしの男がニタリと笑い、手の内に隠した記述棒らしきものを一瞬見せてきた。

よし、見なかったことにしよう。

記述棒は喉から手が出るほど欲しいが！ あんな危険な匂いのする人間に近づくわけがない。

視線を逸らし足早に離れようと歩き出すと、いつの間にかすぐ後ろに人の気配がして、そちらを見れば……。

「お嬢さん、どうです？ 安くしておきますよお」

至近距離でせむし男が伸び放題のくすんだ灰色の髪の下でニタリと笑い、手の中の記述棒を見せてきた。

悲鳴をあげなかった自分に拍手。

68 お久しぶりです

早足で歩く私に、せむし男は苦もなくついてくる。
身長的には私よりも大きいから、歩幅が広いんだろくな。

「先日は、うちの娘から買っていただいたようですね。 どうです、
ほら、今日のは新品ですよ。」

分厚く大きい手のひらの中に隠しながら無理やり見せてきた記述
棒は確かに新品のようだった。

買いたい欲求が高まり歩調が緩まった瞬間、心の隙を突くように
すかさずせむし男に肩を掴まれる。

「へっへっへ。 お代はすぐ頂けるんで？」
顔を近づけて小声で聞かれ、思わずのけぞった時。

「おい！ 何をしているんだ！」
張りのある声と共に、せむし男と私の間に誰かが割って入った。

「へっ、邪魔が入りやしたねい」
せむし男は路上につばを吐き捨てると、間に入った人が捕まえよ
うと伸ばした手をするりと抜けて、流れるような歩みで町の中に消
えてしまった。

私と残された人……ええと、このマントは魔術師の人が着るもの
で、色が薄いので見習い？

振り返った魔術師見習いの彼は、私の顔を見て一瞬驚いて、それ
からふわりと笑った。

「ああやっぱり！ 覚えてませんか、僕のこと。 そうだ！ 頂い
た虹…魔石の代金、まだお支払いしてなかったですよ！ あの魔
石のお陰で、無事に任務を果たすことができました。 本当にあり
がとつございます。」

同じような身長の彼に両手を握られ、ぶんぶんと上下に振られる。……ええと、話から予測しますと、あれですね、以前人攫いに攫われた時に、助けを呼びに行ってくれたあの少年ですね。

よく私のこと覚えていたなあ、私はすっかり忘れ……げぶんふげん。

「こちらこそ、助けていただきありがとうございます」

そろりと掴まれていた手を解いて、にっこり笑ってお礼を言う。

濃紺の髪に若々しいダークグリーンの瞳を持った少年は、人好きのする笑顔で私をお茶に誘ってきた。

69 喫茶

いえね、辞退するつもりだったんですよ。

記述棒も目の前に有ったのに：あの人が買うのは抵抗ありましたけど、不可抗力で買えなくなると欲しくなるものですね。

次に会ったら買ってしまいそうです…。

大通りに面した喫茶店の店頭に並んでいる椅子に座り、買ったばかりの温かいお飲み物に口をつける。

「いただきます」

奢ってくれると言ったが、年下に奢らせるわけにはいかないので、大人の対応として私が払うと言ったのだが…：問答の結果、割り勘だ。

「涼しくなってきたから、温かいものが美味しいですね」

少年も頬を緩めてカップに口をつける。

「そういえば、名前、教えていただいてもいいですか？ 僕はヒルランド・トレックと申します」

ニコニコと聞いてきたヒルランド…ヒルダって略したら怒られるよねやっぱり。

「マモリ・レイ・ロンダットです」

「レイ（既婚）？ あれ？ 結婚されてるんですか？」

不思議そうに首を傾げ、しきりに私の首まわり等を見ている。

「結婚したのは最近ですが」

「じゃあ蜜月なんですよね？」

またミツゲツか、一体何なんだろうミツゲツ。

「はい。ミツゲツです（多分）」

「ですよ？ 失礼ですが…旦那さんと何かあったんですか？」

心配そうに聞いてくるヒルランドに、なぜ旦那に何かあったのかと思うのか聞いてみた。

「え？ だって、ほら、付いてないじゃないですか。蜜月ともなれば、広範囲に散っててもおかしくないのに、ひとつも見当たらないので……いえ、ご家庭の事情があるんですよね！ すみませんっ！」

ちよつと待て、何が？ 何なのミツゲツ！？

つくつて何！？ 広範囲につて何！？

私のいまの状態つて何かおかしいの？

ヒルランドにそれ以上突っ込んで聞くことはできず、それから力ツプが空になるまで少しお話してから、物騒だからと家まで送ってくれたヒルランドに礼を言つてわかれたが……ミツゲツの謎で頭がいっぱいです。

70 時間は少々戻り、ヒルランドの事情

人身売買組織が壊滅した直後、囹役だったヒルランドに異動の辞令が下りた。

元々遊撃性の高い部署なので突然の異動辞令自体は珍しいものはなかったが。

「エルルージュですか？」

赴任先を聞いて流石に首をひねる。

世界有数の魔石の産出地であるエルルージュは、滅多に住民の入れ替わりがない。

魔石の産地を守る兵も、年に決まった人数が数人ずつ入れ替わるだけで、それも赴任する人間及び家族の内情を調べた上で、心身ともに健全なものが行くことになっている。

そう、エルルージュは幹部候補の人間が一度は赴任する土地だ。

そんな場所にこんな中途半端な時期に、まだ階級もろくに無い人間が赴任することになる意味を図れずに困惑した表情を浮かべる。

「君は彼女に会っただろうか？」

大きな無骨な机の向こう側に座る上司に、ヒルランドは少し首を傾げて見せる。

「君に魔石を託してくれた女性だ」

重ねて言われて思い出した。

あの組織に捕まっていた時、コッソリと虹色魔石をくれた小柄な少女：いや女性が思い浮かんだ。

「はい、覚えております」

姿勢を正し頷くと、上司は満足そうに説明を続ける。

魔石都市エルルージュへ向かう乗合馬車の中、旅装束のヒルランドは一人馬車の隅でため息を吐く。

あのノースラアト魔隊長（魔術部隊隊長の意、他意は無い）と同じ勤務先になるのは光栄だと思う、魔術部隊の小隊をまとめ上げ、尚且つ肉弾戦でも一般兵など物ともしない豪傑。問題はもうひとつの方だった。

秘密裏に例の女性を尾行し、虹色魔石の仕入先を突き止めよ。

魔術部隊の総隊長直々且つ内々の指令と共に、ヒルランドに数個の虹色魔石が渡される。

一度使ってその使い勝手の良さは確認済みだったが、本来隊長クラスにしか渡されないはずのこの魔石を、一兵士である自分に渡された理由を考えるとため息が出た。

得意な魔術の分野が隠密に向いているからといって……。

恩人である彼女を探らねばならないのには抵抗がある。

そして、赴任先である魔石都市エルルージュに到着し、任務を開始して愕然とする。

なぜ、彼女は、あのノースラアト魔隊長と一緒に暮らしているんだ！？

訳がわからない、ノースラアト魔隊長の身内であるなら、なぜこ

んな指令が来る。

直接本人に聞けば早いではないか、と。

しかし、命令は命令である。

彼女の住む自宅の周囲に探知魔法を掛けておく、ノースラアト魔隊長は攻撃魔法は得意だがこういった細かい魔法は野営に使うような実践で実用できるものしか興味が無いらしく、気づかれることは無い。

彼女が外出すると探知魔法が作動するので、いつも詰めている内擁壁の詰所で彼女が門を通るのを待ってから尾行する。

数日前も街で買い物をする彼女を尾行していた。

いつもどおり買い物をしていたが、その日はいつもとは違い興味津々で記述棒屋に入って行った。

彼女は魔道具士でもあったのだろうか？

ヒルランドは疑問に思いながらも、彼女が店から出るのを待った、店から出てきた彼女は若干肩を落としている。

そして、その彼女に小さな少女が接触した。

彼女と少女は短い会話の後、路地の陰で何かの取引をしたようだった。

ヒルランドは表情を引き締め、自身に掛けていた存在感を薄くする魔法をもう一度かけ直し、路地裏に消えていった少女の後を追った。

少女は土地勘があるらしく、細かい路地を縫うように歩いてゆく。

引き離されないようにするのが精一杯だった。

だが、途中で横道から飛び出してきた赤毛の青年にぶつかり、少女を見失った。

痛恨のミスから5日、久しぶりに彼女が外出した。

ヒルランドは装備を整えて彼女の後を追う。

今日彼女は記述棒屋には入らなかった、だが、先日少女が彼女と密会した路地に、今度は灰色の髪の方が居た。

ヒルランドは呼吸を整え、身構える。

だが、男と対峙する彼女の様子がおかしい、どうも本気で嫌がっているようだ。

その彼女に執拗に絡む男。

気がついたときには、男から彼女を守るように身を呈していた。

振り返った先にいた彼女が疑問に思う前に先手を打つ、あくまで偶然を装って。

「ああやっぱり！ 覚えてませんか、僕のこと。 そうだ！ 頂いた虹：魔石の代金、まだお支払いしてなかったですよ！ あの魔石のお陰で、無事に任務を果たすことができました。 本当にありがとうございます」

外見通りの幼い言動をしたヒルランドに、彼女はふわりと微笑んだ。

「こちらこそ、助けをありがとうございました」

何気なく外された手は少し震えていて、彼女の動揺を教えていた。だから、本来ならばすぐに別れるべきだったのに、喫茶店へと誘っていた。

暖かい飲み物1杯分、彼女が落ち着くだけの時間と自分に言い訳して。

そして、彼女のフルネームを聞いて内心愕然とする。

マモリ・レイ・ロンダット

ロンダット…間違いようが無く、現在ヒルランドの上司である男の妻である。

印も無いことから、ただ同居している身内である可能性も捨てていなかったのだが…。

動揺してからは、当たり障りのない会話をしマモリを家まで送り届け、詰所へ戻り本部へと送る報告書を書くことで平静を取り戻そうと努めた。

71 夫婦のしるし1

夕飯後、ソファでくつろいでいるラートの隣に座り、いつものように少量のお酒を口にしていたのだがしかし。

本日の日中にヒルランドから聞いた、ミツゲツの事が気になって仕方がない。

むしろ、お酒が入ったせいか、解明したくてしようがない。

「マモリ？ どうした、さっきからソワソワしているようだ」「そうラートに声を掛けられ、意を決して聞くことにした。

「あ、あのね？ 私の故郷にはなかったんだけど、ミツゲツって、どういうものなの？」

風習的なものなら、この聞き方をすれば問題が無い…よね？

「今日、町に買い物に出た時に、ミツゲツなのについてないですねとか言われたんだけど、なんの事かわからなくて」

そう言うと、ラートの視線が泳いだ。

「うむ、これは、”ついてない”っていうのが何の事かわかってるな？」

「あー、そうだな。だが、私とマモリは…契約、結婚ということだから……」

歯切れの悪いラートに、グラスをテーブルに置いて体ごとラートの方を向く。

「契約っていつても、それが無いと不信がられるようなことなんだよね？ それって凄く難しいことなの？」

契約結婚だから…必要以上のことはしたくないとか、そう言うことなら仕方がないのかなって思う。

「だけど、ラートは瞬時に否定する。」

「難しくはない。マモリが許してくれるなら、今すぐにでも」「今すぐどうこうできる問題なのか？」

いや、しかし、この食いつきようは……。

「で、一体なにがあれば、おかしくないの？　そして、ミツゲツって何？」

ミツゲツ＝蜜月

新婚初期、いちやつきまくる期間、ぶつちやけていいますとイタしまくる期間、この時期は本来仕事もほとんど行かないのが通例。ヒルランドが言ってた、蜜月に付いているものというのが。

「キスマーク？」

確かにイチャつきまくる期間なら、付いていてもおかしくはないかもしれないけど。

「本来、結婚したらすぐに一箇所固定の場所を作って消えないように毎日痕をつける、それが既婚の印でもあるからな。蜜月ならば、それプラス数力所に痕があるのが普通だ」

……結婚指輪的なものがキスマークですか？
それも消えないように毎日。

「マモリが敢えてそのことに触れないようにしているのだと思っていたが。そうか、風習が違うのだから知らなかったか」
え、ちょ……！　その期待に輝く瞳は……っ！？

期待されると裏切れない、日本人体質が恨めしいです。

ベッドに行こうとか言われたけど、それは流石に身の危険を感じるので却下しました。寝る時は一緒なんだけどね。

少し首周りをくつろげて、吸いつきやすいように傾げる。

一応お風呂に入った後だから綺麗だとは思うが……ちょっといたたまれないので、早く終わらせて欲しいです。

「どこが良い？」

いや、聞かれても困ります。

「つけやすい所をお願いします」

「……わかった」

ラフトに腰を引き寄せられ髪を掻き上げられた。

首の付け根に息がかかり、唇が触れ、濡れた感触がそこを舐めながら肌を吸い上げられる。

覆いかぶさるように私を抱きしめ、何度も首筋を吸っては離れて、少し痛くなったところで唇が離れた。

「ついた？」

「ああ」

腰を抱いたまま、キスマークをつけたところを指で撫でる。

「あと数箇所つけるが……いいか？」

蜜月だからか！ うううっ、まあ仕方あるまいっ！

髪を掻き上げ、首の後ろや耳の後ろ、鎖骨等に付けられました。

終わった時にぐったりしてしまったのは、あれです、酒がまわったんです、きつと！

72 夫婦のしるし2

「では、こちらにも頼む」

くったりしているところに低い声でラアトに囁かれて、一瞬固まっ
つてしまいました。

そうですね、結婚指輪的なものだとしたら、旦那様にも必要で
すよね。

まあ、キスマークを付けたことが無いわけではないですから、い
いですけど？

「じゃあ、失礼しまーす」

膝立ちになり、ソファに背を預けているラアトに向き直る。

どこにつけるのがいいかな、あんまり目立つところにつけるのも
いたたまれないよね、私が。

ラアトのシャツのボタンをひとつ外させてもらって、すこし衿元
を広げて左側の首の根元辺りに狙いをつける。

チュウツ

吸い上げる音にびくりとラアトが揺れた。

くすぐったいのかな？ まあ私も我慢したし、ラアトにも我慢し
てもらわなきゃね。

段々調子が出てきたぞ、と。

こう横からだと体勢が悪い、いよつと！ ラアトの膝の間に片足

を入れて、うんうん、やっぱり正面からやったほうがやりやすい。

「ひとつ目完成ーっ。次ー」

「マ、マモリ…っちょっと待」

待ちませーん、くいつとラアトの顎を持ち上げてちょっと首を横にして、吸いつきやすくなった首に唇を落とす。

気がつけば、ラアトのシャツのボタンを全開にして膝の上に座り、首筋と言わず肩や胸の辺りまで跡を付ける。

ひとしきり楽しんでからぺつとりと張り付いていた体を起こし、綺麗な筋肉のラアトの体に散ったキスマークを見る。

我ながら、良い仕事をしました！

それにしても、なんて素敵筋肉なんだろう…。

魔術師って、もやしっ子っていうイメージがあったんだけど。

いや、今日会った少年は確かに華奢っぽかったぞ、お城で会った偉そうな人も普通の体型だったはず。

ということは、ラアトが特別？

なんてことを考えながら、ぺたぺたと筋肉に触れているとため息と共に声を掛けられた。

「……もう気が済んだか？」

なんでそんなに息も絶え絶えなんですか？

「どれだけ我慢してると思ってる」

！？

「襲っぞ？」

！！

「失礼いたしましたっ！ それでは私、お先に就寝させていただきますっ！ おやすみなさい！」

73 不可欠！

起き抜けにキスマークの補強をすることが日課に加わりました。

あー、そういや、宿屋の女将さんの首筋にも大量のキスマーク付いてたよなあ……あのご主人だからなんだと思ってたけど、風習だったんだねえ。

女将さん達元気……だよ、元気な姿以外は思い浮かばないや。

小分けにした生地を麺棒で丸く伸ばしていく、大量に。

伸ばし終わったら、中に具を入れてひだを寄せて包んでゆく、大量に。

できた餃子は皿に並べておく、すぐに焼けるように。

そして、気づいた。

油が切れてる！！

どうしても焼き餃子が食べたかったのに、油がないという致命傷。水餃子も、蒸し餃子もつくるけど、焼き餃子も食べたいのよ！

まだ陽が高い、今からダッシュで買ってきたら間に合うよね。

肌身離さず持っているポーチが腰にあるのを確認し、お財布と油入れを買い物かごに突っ込んで家を飛び出した。

74 灰色の髪の男

二度あることは三度あるという言葉通り、また、引っかかった。

「やあ、お嬢さん、奇遇ですなあ」

灰色の髪の下でニタリと笑む口元だけ見えるせむし男。

奇遇じゃない、待ち伏せしといてそれは無い。

家から一直線に雑貨屋（に油が売ってるので）に来て、一直線で帰る。

確かに雑貨屋は街の真ん中辺りだが、記述棒屋はもっと先だ。

そして、あんたは明らかにずっと向こうに居た、私は気づいて早足で逆方向に歩いた。

なのになぜ、息も切らさず横の路地から出てくるのかなあ。

きもちわるい。

「さあて、ご所望の品、ありやすぜい？」

記述棒をこっさり見せてくる男に、ゲンナリする。

「要りません」

足は止めずに拒絶する。

「まあたまた、お嬢さあん、この前買ったのはどうしたんですう？」

もう使っちゃまったんでしょう？ 何をお作りになったんですかあ、

ちよつと教えて下さいよお」

せむし男は両手をポケットに突っ込んだまま私の耳元に声を吹きこんでくる。

私のセカセカした足取りとは違い、ゆったりとした歩調について

くる。

「くつくつく……どうです？ お嬢さん、もつと堂々と魔道具を作ってみたくはないですかあ？ 良い話があるんですよあ？」

口調は気持ち悪いが声質は悪くない、むしろ良い声してるのに。それにしても、いい話ってなんだろう、魔道具を堂々とつくるってことは師匠に弟子入りってことだよな？

「師匠を持つには、金がかかりすぎて私には無理ですので、他をあたってください」

「いえいえ！ お金はかかりませんよあ。少しお時間いただけますかあ？ 詳しい話は……おやあ、お嬢さん、いや奥様でしたか、これは失礼」

せむし男は不意に言葉を区切ると、素早い動きでクイツと私の襟元を引つ張った。

「なっ！！」

絶句している私の首筋を、ざらりとした指先が撫でる。

「残々念ん。あああ、残念すぎるう」

私が手をはたき落とす前に衿から手を離れたせむし男は、そう言いながらしゃがみ込んだが、突然立ち上がると、くるりと回れ右をして街の中へ消えていった。

……………なんだったの？

呆然とする私に答えてくれる人は居ない。

75 やっぱり戻ってきちゃった、てへっ！

夕焼けの街を抜けて自宅へと向かう。

そして、市民街から高級住宅街及び官舎がある区域の間にある擁壁を抜ける手前で、攫われました。

二度目ですね、誘拐されたの……。

「やっぱり気になったから戻ってきちゃったよあ。ごめんねえ、奥さあん」

悪いと思うならしないでほしい。

こっそりとナイフを当てられている状況では文句も言えません。

ナイフで脅されたまま、商店街を逸れて街中をグルグルと歩きまわり、やがて一軒の家に入った頃にはもう日もすっかり落ちて、自分が何処に居るのかよくわからなくなっていました。

一人で帰れないです。

周囲のお家と同じ、景観に配慮された一軒の家の中は…これまた普通。

居間に通され向かい合わせのソファに座らされる。

そして、隣に灰色髪のせむし男が座る。

居心地が悪い。

もうナイフは片付けられたけど、傍らの男はだらしなく半身をこちらに向けまじまじと私を観察しているし。

「なあ、あんた、何処の国のヒト？」

髪を一房指先に絡めて、ニヤニヤと聞いてくる。

「この国の人間です」

結婚したんだから間違いではない…よね？

「へええ、そお？ この肌、絶妙だよねえ」

「日焼けです」

「そお？ その割にこっちもいい色だよねえ」

くいつと衿元を引かれて、服の下の肌を見られる、エロめ！

無言で手を掴んで離せると、あっさり手が離れる。

「昨日までは無かったのにねえ。 昨晚は旦那と頑張ったのかなあ

？ んんー？」

下世話な！ 思っても言うもんじゃないでしょう。

そして顔を近づけるな。

既にソファのギリギリ端っこまで尻を異動させてるから、逃げ場が無い。

「下品なことはやめろ」

ゴッ…という鈍い音と共に、灰色の髪の男が沈んだ。

灰色の髪のせむし男は、いつの間にか部屋に居た赤髪で特徴の無い容姿の男性に部屋の外に放り出された。

「申し訳ありません。彼にはキツク言っておきますので、この度の無礼はお許し願いませんでしょうか。迷惑料としてこちらを差し上げますので、どうぞ今回の事はご内密に願いますか？」

そう言っただけで差し出されたのは、新品の記述棒だった。頬がひきつる。

「いえ、どうぞお気遣いなく」

精一杯背伸びをして記述棒を遠慮する。

ここで受け取ってしまったら……嫌な予感しかない！

「それよりも、もう帰ってもよろしいでしょうか。早く帰らないと、家の者も心配いたしますので」

腰を上げかけると、ちゃんと送るからお茶でも一杯どうですかと勧められ。

ぐうー……

あれか、あの記述棒を貰っておいたらこんなことにならなかったのか！？

一服盛られて目覚めたら朝でした。

一般的な部屋のベッドの上で、いつの間に着替えたのか寝間着。きつと夢遊病の如く着替えたんだろっ、うん。

脱いだ服は昨日買った荷物…油と共にベッド脇の棚にあったので、着替えておく。

ああ、一個違うところがあった。

私の大事なポーチが無い。

さすがの私も、嫌な予感しかしなわけです。

窓の外を見れば街並みの向うに壁が見えるので、街は出ていないとわかる。

コッソリと部屋のドアを開けて外を伺……。

「やあ、おはよう」

ドアの横に背をもたせかけ、灰色髪の毛のせむし……じゃない。

びっくりして見上げた視線に気づいたのか、ちゃんと背中を伸ばした灰色の髪の毛の男は、長い前髪の下でニヤリと口元を歪ませた。

「おはよう、奥さあん。良く眠れたかあ？」

……。

そつとドアを締めました。

78 待ち時間は嫌なもの

「閉めんよ。大事な大事なお話があるからねえ」
ガゴンッ！

閉まりかけたドアの隙間に靴を突っ込まれて、そのまま足で蹴り開けられました。

睨みを効かされながら、昨日通された居間へ。

朝食が出るなんて期待はしてませんよ、むしろ今日はお茶も遠慮しなくては。

流石に二回も盛られるわけには行きません。

……まあ心配する以前に、お茶なんて出てないわけなんですけれども。

居間のソファに居心地悪くちんまりと座る。

ドアの前にはあの灰色の髪の毛の短腹男が腕を組んで立っている。

またあの赤毛の人が来るのだろう。

ああ、早く帰りたい。

ラァトが心配なりなんなりしてると思うのです。

もしかしたら捜索隊が出ているかも知れないのです。

私の身柄は結構重要ですよ、虹色魔石を……あううう（思考放棄）

嫌だなあ、早く来ないかな、いや、来ないなら来ないでもいいんだけど。

面倒くさいことや嫌なことはさっさと終わらせたいな。

いや、待てよ。

虹色の魔石の事がバレたとしてだね。

この人達は十中八九悪い人達だとしてだね。

虹色魔石の入手先を聞かれるだろうね。

魔術師である旦那様からお借りしましたー、とか……無い、無い
わぁその言い訳。

黙秘だろうなあ。

でも、そうしたら自白剤（あるのか？）なり拷問（あるよね、間違
いなく）なりに身を晒す事になると思うわけです。

なにせ、彼らは悪党ですから（もう決定）。

さあ、どうやれば無事に家に帰れるのか。

これはもう、外的要因に頼むしかあるまい……今まで一切信じて
こなかった神様、本気で助けてください、助けてくれたら貴方の敬
虔な信者になりますから。

ガチャリとドアノブが回った瞬間、ビクッと肩が跳ねたのはとて
も人間らしい反応だと思えます。

おとなしく（悶々としながら）待っていたら、やっとドアが開いて……。

てつきりあの赤毛の男が来るんだと思ったら違った。

無茶苦茶事務っぽい人がきた。

どこがっていうと。

黒縁の分厚い眼鏡、黒い腕ぬき、白シャツにサスペンダーまでして、髪の毛が七三分け。

髪の毛の色が黒じゃなくて鈍い赤っていうのがなんだか残念である。

まだ若そうなその彼が形ばかりの挨拶をしながら私の向かいのソファに座り、持ってきたカバンから書類とか筆記用具とかを出してテーブルの上に並べだした。

その中に記述棒を見つけ頬がひきつった。

七三分けの人の準備が終わると面接と実技試験が始まった。

ドアの横に突っ立ったまんまの灰色の髪の毛の男も無言のまま見てるだけだし。

……………どゆこと？

「それでは、最初に僕が質問をしますので、答えてください」

バインダーっぽいものを手にした七三は至極事務的に始めた。

「あ、あの、ちょっと聞きたいことがっ」

そもそもコレは何なのかと。

聞きかけて、七三の眼鏡越しの鋭い視線に口が勝手に閉じた。

「最初に、僕が、質問をします。貴方は、それに、答える」

はつきりしつかり区切りながら繰り返す七三に、これ以上言つと七三の機嫌を損ねて、この犯罪組織（多分）の始末要員とかにさっくり処分されそうな気がしたので、無駄な努力はやめた。

「了解いたしました」

「よろしい。では。貴方はお金が欲しい？」

……魔石を売って貯めた金が結構あるので、それ程でもないの

「NO」と答える。

「貴方は魔道具に興味がある」

NOと答えたら、もしかしたら逃して……くれないよね、うん。

じゃあYESにしておくかな、黙秘権なんて無いようだし。

その後、数問聞かれてヒアリング調査は終わった。

七三は私の目の前に白紙と、普通のインクを付けて書くペンを置いた。

「それでは、魔道具用の何か簡単な式を書いてください」

はいキター。

81 書くともさ

差し出された白紙の前で固まる私の前に座る七三は静かに待つ。

書いても良いのかな……。

書かないと、どうなるのかな、最悪始末される？

良くて、そのまま家に帰され……ないよね。

……よし、書くか。

ペンにインクを付けて、つつかえながら白紙に走らせる。

「公用語で記入してください」

手元を見ていた七三に注意された。

だよね、日本語わからないですよね。

「こ、公用語、書けません」

素直に申告すると、うぬっ……と七三が唸って考えこむ。

因みに書いた式は”扇風機”の式（それもダイ ン式の羽のないタイプ）。

これだと、風属性の魔石が有れば作れるわけですよ。

虹色魔石がバレてる可能性もあるけれども（ポーチの動力用に入れたのが見つかったら）全属性の魔石を基準に式を作るのはやめておいた。

でも、読めなければそこまで気にする必要ないよねえ、気を回しすぎたか。

「何処の言語ですかこれは……。なんて統一性の無い」

ええ、本当に。

平仮名カタカナ漢字にローマ字を組み合わせて書いてあるから、知らない人が見ればバラバラだね。

「…いいじゃないですか、これでもちゃんと動くんだから……」

「動きますか？」

あからさまに疑う視線に頷くと、とうとう記述棒を渡された。

「ではその式を使用して、魔道具を作成してください」

82 作るもさ

「魔道具を作成してください」

言うのは簡単だけどさあ……。

いえ、ここまで来たんだから作りますよ、作りますけれどもね。

なんで扇風機にしちゃったかなあ、それも無羽式の。

只今絶賛工作中であります。

土台にする箱の内側に式を書き込みます。

うん、長さのある記述棒は使いやすいね。

魔石は土台の底面に嵌めこむようにして、あとは土台の上に輪っかを載せる。

この輪っかの内側から風が出て周囲の空気も巻き込んで素敵扇風機になると、そういうことです、それもファンが無いので音が出ないし、お子さんがいる家庭でも安心安全設計！

ついでに、火の魔石を入れる場所も作っておいて、ここに火の魔石を入れるとあら不思議、素敵ファンヒーターになるって寸法ですよ奥さん。

温風の温度設定は50度で固定、ダイヤル作ったり式を追加するの面倒くさいとかそういう理由で。

七三に監視されながらも何とか完成。

ああ、おなががすいた。

朝食抜きの昼食抜きか、せめてポーチがあればあの中にハムとかソーセージを入れてあったの……ああああ！ すっかり忘れてたけど、餃子！ 私の餃子が！ 多分干からびてる……なんてことだ

…。

思い出すと、お腹の虫がグーグー鳴り出した。

水餃子が食べたい…当分焼き餃子は見たくもない、ヤツのせいでこんな目に！（八つ当たり）

「完成ですか？ それで、コレは一体何でしょう？」

まじまじと扇風機を見る七三は、なんだかワクワクしているようだ。

私が答えようとしたら、ソレを片手を上げて止められた。

「この丸い部分が重要なんでしょうね、土台があるわけですから、この輪の部分を壁などに掛けるわけではなさそうですね。輪が若干内側を向いているのも意味があるのですか？ そうですか。使う魔石は？ 風ですか！ ほほう！ ではこれは風を送るための？」

満足すると、丁寧な手つきで扇風機を倒し、底面にある魔石用のスロットの一つにポケットの一つから取り出した水色の魔石を嵌め込んだ。

「おや？ もう一ついれるのですか？」

「もう一つは、後で火の魔石を入れてください。 とりあえずは、扇風機として実験したいので」

七三はフンフンと頷き扇風機を起こすと、レバー式のスイッチを入れた。

「ふおおおおお！！！！ 風が！！！！」

いや、だから扇風機って言ったじゃ……あれ、なんか嫌にいいイキオイで七三の髪がなびいて……あわわわ！ 七三が七三じゃなくなっただけ！！！！

だが髪が乱れるのも構わず七三は扇風機の前に陣取り、かなりの

風量を発生させている扇風機の輪っかの中央の空間に手を突っ込んだりしてキャツキャツしていた。

ひとしきり扇風機の”確認作業”が終わると、おもむろにスイッチを切り、今度は火の魔石もセットしてスイッチオン。

「おおおおお！！！！ 暖かい！！ 何という心地良い暖かさ！！」
「またも風に髪をなびかせて、七三が感動している。」

とりあえず茶々は入れずに、七三がクールダウンするまで温かい目で見守っておいた。

83 魔術式記述資格者証

ひとしきり扇風機ヒーターを堪能した七三は手ぐしで髪を整えた後、また私に向き合った。

「貴方の魔道具作成能力を確認いたしました。文字が共通語でないことは少々問題ではありますが、魔道具の作成に関する技術については申し分ないでしょう。では、魔道具協会の名において、魔術式記述資格者証ライセンスを発行いたします。おめでとございます」

「……………は？」

「資格者証カード発行までに5日掛かりますので、ご了承ください。ライセンスでは、お疲れ様でした、失礼します」

七三は机の上に広げてあった書類や筆記用具一式等をカバンに手際よくしまつと、声を掛ける間も無くさっさと部屋を出て行ってしまった。

七三の後ろ姿を見送ると、ドア脇に居る灰色の髪の男が目に入った。

「今まで全く気にならなかったのはあれか、”気配を消した”的な何かだろうか。」

ドアが閉まる前に、何かの合図のように二拍手した灰色の髪の男がゆっくりと近づいてきた。

「一発合格とはやるねえ。面白い魔道具じゃねえか、二種類の魔石を使うなんざあ上出来だ」

テーブルの上に置いてある扇風機のスイッチを入れ、七三と同じように興味深そうに観察する。

七三にしてもそうだけど、魔道具が好きなのか？
不意にドアをノックする音が響き、灰色髪の男が入室を促す。

そして、テーブルの上には豪華な食事が！！

「合格祝いだ」

食事をワゴンに載せて持ってきた、赤髪の男がそう言って食事を薦めるんだけども。

昨日私のお茶に睡眠薬仕込んだこと忘れてませんか？

お料理がいい匂いですけども！

若干いつもの酸っぱい香りがしますけども！

お腹がぐーぐーなってますけども！

「い、いい加減お家に帰らせてください」

「まあ、飯を食ってからでも良いだろう、どうせ外泊しちまったんだしよお」

良くない！

灰色髪の男は七三が座っていたソファに腰を降ろすと、オードブル形式で広げられてる料理をパクパクとつまみ出した。

ぐきゆううう……

「毒なんざあ、盛ってねえ。昨日から飲まず食わずなんだ、少し

ぐらい腹に入れておけやあ。腹の虫も音を上げてるじゃあねえか」

肩を揺すって低く笑う灰色髪の男をつい睨んでしまう。

パクパク料理をつまんでいる灰色髪の男を睨んでしまう。

美味しそうに食べてるよね……。

「ほら、俺が食ったって平気だろおが」

皿とフォークを目の前に置かれる、うろう、くそう！
腹が減っては戦が出来ぬ！！！！

「いただきますっ」

ヤケクソ気味にそう宣言し、フォークに鳥の唐揚げを突き刺して
パクリ。

……隠し味（隠していないけど）の酸味に眉間にシワが寄ってしま
うが、酸味を凌駕する肉汁の旨味に次へ次へと手が伸びてしまう。

うろう……口惜しいが美味うまい

ぐう。

84 失笑

「……ものの見事に引つかかってくれる。おい、寝るなよ、さっさと解毒薬を飲んでおけ」

赤髪の男はうつらうつら始めた灰色の髪の男にそう注意をする。

「ああ……やっぱり、”薬屋”の薬は良く効きやがらあ。耐性のあ
る俺ですらこうだ、嫌になっちまわあなあ」

灰色髪の男は気を抜くと遠のきそうになる意識を気力でつなぎながら、ポケットから取り出した小瓶の液体をクイツと一息に飲み下す。

「うえええ」

「吐くな。飲んだらさっさと移動するぞ。ここがバレるのも時間の問題だ」

ぱっぱとテーブルの上の睡眠薬入り料理を片付ける赤髪の男に、灰色の髪の男はダルさを全開にしてソファの背もたれに両腕を広げだらしなく座ったまま手伝おうとはしない。

「バレやせんだろお。バレたところで、この家の名義はアノヒトだ、踏み込めやしねえ」

喉の奥で低く笑う男に、赤髪の男は否を唱える。

「そもいかん、この娘を探しているのは、最近赴任してきた中央の魔術師二人だ……厄介な人間を引いたかも知れん」

苦々しくそうこぼす赤毛の男は、自らカートを押して食器を下げに行く。

それを目だけで追ってドアが閉まったところで、視線を目の前で無防備に寝ている娘に戻す。

「魔術師二人かあ……」

つぶやいた声はウキウキとして、まるでこねから起ることを楽しみにしているかのようだった。

85 脱走する？

……また違う部屋だ。

起き上がり、見回した室内は昨日寝かせられていた部屋より若干生活感のある部屋だ、小さいタンスや机まで置いてある。

ということとは…どうということ？

寝過ぎるほど寝た気がする、窓の外は薄暗くて窓を開ければ入ってくる空気は朝独特の透き通るような冷たいものだった。

ということは、早朝。

窓から見える景色にはちゃんと城壁があるから、街の外に連れ出されたわけではないね。

ただ……なんか、この家、大きいよね…庭まであるよ？

ここ基本城壁の街だから、一軒一軒の敷地って狭くて庭なんて持てるのはかなりのお金持ちなのに。

……そうか、かなり金持ちなのか。

それで、金持ちが私みたいなのを攫って何か良い事あるのか？

魔道具士の認定試験まで受けさせて？

虹色魔石を作り出せる事がバレてるわけ…ないよね、いや、あんな作り方バレルはずもないとは思っただけど。

ただ、ポーチを未だに返して貰ってないことが気がかりなんだよね。

……ポーチは諦めて、今のうちにここから脱走しておくか。

とりあえずセオリーとしては窓から逃亡だが、どうやらこの部屋は二階で、窓の外に飛び移れそうな木もないし、そもそも有ったとしても私の身体能力では枝につかまれず落下する。

……普通にドアから出ておこう、そうしよう。
案外堂々としていればバレないかもしれない。

なるべく音を立てないようにドアを開ける。

「おはよう、奥さぁん。早起きだねえ」

またこいつか。

86 概要

灰色の髪の人に連れられて階下へ降りる。

人の気配がする、どこからか朝食の用意をしている良い匂いが漂ってくる…若干例の酸味の独特な香りもするが。

「ここあ、ゲイリーク様の屋敷の一つだ。泊まり込みの弟子用の屋敷だからよお、お前えも希望すりゃ部屋をもらえるぜえ？」

……？

ゲイってというのが誰で、弟子って何のことだろう。

疑問が顔に出ていたのだろう、自覚はある。

「……ゲイリーク様って分かるかあ？」

「わかりません」

灰色の髪の男が言うには、ゲイリーク様とはこの街の魔道具組合の支部長だということだ、お偉いさんだと覚えておけばいいと言われた。

「ゲイリーク様はあ、将来性のありそうな技術者を育てる事に熱心な……ええと、そうだ、そうだ、後進の育成に熱心なお方でよお、こうやって将来有望な若者に機会を与えてくださるってえのよ」

将来有望な若造を誘拐監禁して魔道具を作らせてます、という風に聞こえるのは気のせいでしょうか。

「へっ、信用してねえなあ。まあわからなくあねえがよお。ゲイリーク様は、アトリエを貸してくれて、記述棒も支給してくれるってえのよ。まあ勿論、なんぼか金は掛かるがよお、売った魔道具の代金から天引きされてもよお、残った金でも結構な収入にやな

るんだぜえ」

魔道具の売上からアトリ工代と記述棒代が引かれて、残りが自分の収入になるということ？

「ああ、売るのはゲイリーク様ん所の店がやるからよお、作るのに専念できるってえことよ」

それって…売上ピンはねされても分からないんじゃないか？

「 収支の明細ぐれえあるから、希望すりゃ写しを貰えるぜい」
ふむ、収支明細書あるのか…思ったよりまともっぽい。
明細があれば、販売額が妥当かどうかも確認できるしね。

い、いやいや！ こちとら誘拐されてるんじゃないか、うっかり
納得しちゃいけない！

なんだけどっ！ ……それって、手に職が付くってこと
だよな？

87 勧誘

青田買い、ということなのですな、強引にも程がありますが。

まず、使い古しの記述棒を物欲しそうな人物に与えます、その際渡す人間は相手に警戒心を与えない子供を使います。

次に街で同じ人物が前に記述棒を売ってきた子供を探しているようなら、ゲイリーク氏の雇っている人間が接触して交渉を始めます。ただ、この交渉役に灰色の髪の男は不適當だと思つのです、凄く思つのです。

何回か交渉して、ダメならば引くし、お互いの利害が一致したら雇用契約を結ぶ。

ゲイリーク・リタ・ランブラットと名乗った品の良さそうな紳士が懇切丁寧に説明くださった。

魔道具組合の支部長なお偉いさんなんだよね…？

いや、偉い人オーラはそれなりにあるんだけど、なんで私みたいな小娘にわざわざ時間を割いてくれるんだろう？

こちらの世界のお偉いさんは時間的余裕があるんだろうか。

「で、貴女はランブラット商会に所属する意思はお有りですか？」
直球ですな紳士殿。

メリットは、身元を隠したまま収入源を作れる事、販売を商会に任せるので魔道具づくりに専念できること、商会経由で記述棒を仕入れる事ができる事。

デメリットは、ランブラット商会以外には卸せない事、ライセンス魔術式記述資格者証は商会預かりなので自分で記述棒を購入することができない事、商会を裏切ると何かしらの罰則があること。

現在、同じようにランブラット商会の庇護下で働いている魔道具士は17人も居るらしい。

この宿舎（むしろ屋敷だけど）に住み込みの人間が12人居て、他の5人は自宅通勤だったりするらしい。

自宅で作ってはいけないのか聞くと、魔道具の実験は危険なので、頑丈に作られている建物内で行わなければならぬ規則であるとのことでした。

「もし、商会に所属する気が無いと言ったら？」

ドキドキしながら聞けば、ゲイリーク氏は苦笑してそれも有りだと答えてくれた。

「ただしライセンス魔術式記述資格者証の事は諦めていただきます。本来、修行期間を経てから得られるものを特別な計らいにて発行したもので。今後もし資格者証が欲しいとなりましたら、通常通り弟子入りして修行期間を経てから資格試験を受けていただくことになります」

「……………うーうん？」

資格者証は没収で、もう一回取得するとしたら正規の…まどろっこしいやり方しかないよ。

たしか弟子入りするには結構なお金が掛かるんだよね？

お金よりも何よりも、弟子入り期間が長いのもネックだね。

こうなれば、いつそ堂々と魔道具士になってしまおうのがいいと思うのですよ。

その為の唯一無二のネックの打倒は重要課題です。

というわけで。

「ゲイリークさん、ウチのしゅ…主人を説得するの、手伝ってもらえますか」

初対面の人間に応援を頼むなんて恥ずかしい真似ですが、自分一人で説得する自信はありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5678x/>

虹色魔石の生産者

2011年12月11日23時50分発行